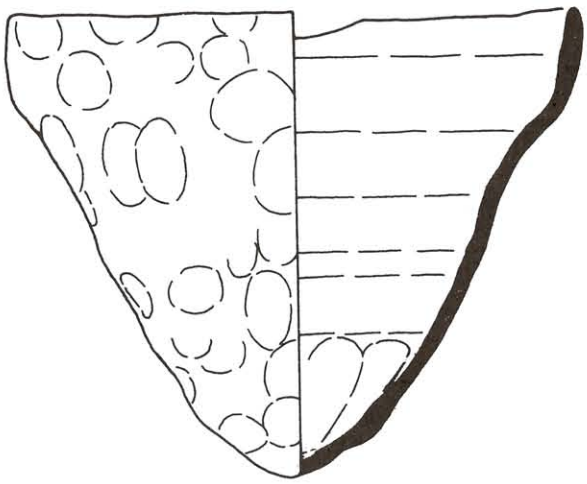
―――府営地域総合オアシス整備事業（泉南地区・双子池改修工事）に伴う―――

# 男里遺跡発掘調査概要・II

―――泉南市男里所在―――



1997. 3

大阪府教育委員会

# はしがき

男里遺跡は、大阪府の南部、和泉山脈に源を発する男里川東岸に展開する縄紋～鎌倉時代の集落跡です。

今回の調査は、府営地域総合オアシス整備事業（泉南地区・双子池改修工事）に伴うものです。この調査では、弥生時代後期から古墳時代前期にかけての大溝や、飛鳥時代頃の自然流路から「しがらみ」跡が検出され、また貴重な飛鳥時代の製塩土器など多数の遺物も出土しました。これらの遺構と遺物は本地域の歴史にとどまらず、日本の古代史を解明していく上でかけがえのない重要な資料になるものと確信できます。

本調査が、関係諸機関及び地元の皆様の多大なる御理解と御協力によって進めることができましたことに深く感謝の意を表します。今後とも本府文化財保護行政に対して一層の御理解、御協力を賜わりますようお願い申し上げます。

平成９年３月

大阪府教育委員会
文化財保護課長　鹿　野　一　美

# 例　　言

1．　本書は、大阪府教育委員会文化財保護課が、大阪府農林水産部耕地課より依頼を受けて、平成８年度に実施した泉南市男里所在、男里遺跡の府営地域総合オアシス整備事業（泉南地区・双子池改修工事）に伴う第２次発掘調査事業の概要報告書である。

2．　調査は、大阪府教育委員会文化財保護課技師　上林史郎を担当者として実施し、平成８年１１月１日に着手し、平成９年３月３１日に終了した。

3．　調査の実施にあたっては、大阪府泉州農と緑の総合事務所、泉南市、泉南市教育委員会、(財)大阪府文化財調査研究センターの他、地元関係者の方々から多大な援助を受けた。記して感謝の意を表したい。

4．　本書の執筆及び編集は、上林があたった。

5．　本調査にあたっては、写真・実測図などの記録を作成するとともに、カラースライドを作成した。広く利用されることを希望する。

# 目　　次

はしがき　　大阪府教育委員会文化財保護課長　　鹿野一美
例　言

# 本　文　目　次

第１章　調査にいたる経過……1
第２章　調査の方法……3
第３章　男里遺跡をめぐる環境……4
第４章　調査の成果……7
　第１節　基本層序……7
　第２節　弥生時代後期～古墳時代前期の遺構と遺物……8
　第３節　飛鳥～奈良時代の遺構と遺物……25
　第４節　その他の遺構と遺物……34
第５章　まとめ……37

# 挿　図　目　次

fig.1　泉南市及び男里遺跡の位置
fig.2　男里遺跡の調査区（S≒1/7,000）
fig.3　調査区の地区割り
fig.4　遺跡分布図（S＝1/25,000）
fig.5　調査区基本土層図（垂直1/40，水平1/400）
fig.6　調査区（Ⅰ区）遺構配置図（S＝1/400）
fig.7　溝１、溝７の平面図および断面図（S＝1/40）
fig.8　溝７遺物出土状況（S≒1/20）
fig.9　落ちこみ１遺物出土状況（S＝1/20）
fig.10　溝１出土土器①（S＝1/3）
fig.11　溝１出土土器②（S＝1/3）
fig.12　溝７出土土器①（S＝1/3）
fig.13　溝７出土土器②（S＝1/3）
fig.14　落ちこみ１出土土器（S＝1/3）
fig.15　落ちこみ２出土土器（S＝1/3）
fig.16　流路１北西部土器だまり（S＝1/8）
fig.17　流路1内「しがらみ」平面図および北・西・南壁断面図（S＝1/40）
fig.18　溝３遺物出土状況（S＝1/20）
fig.19　流路1内「しがらみ」および溝2出土土器（S＝1/3）
fig.20　流路１北西部出土土器（S＝1/3）
fig.21　溝３出土土器①（S＝1/3）
fig.22　溝３出土土器②（S＝1/3）
fig.23　調査区横断面図（S＝1/60）
fig.24　黒灰色土他出土土器（S＝1/3）
fig.25　青灰色シルト他出土土器（S＝1/3）

# 写　真　目　次


| | | |
|---|---|---|
| | 調査区全景垂直写真 | （上が北） |
| ＰＬ．１ | 双子池全景斜め写真 | （北から） |
| | | （南から） |
| | | （北から） |
| ＰＬ．２ | 調査区全景斜め写真 | （東から） |
| | | （西から） |
| | | （南から） |
| ＰＬ．３ | 溝１全景 | （南から） |
| | 溝１、溝７断面 | （北から） |
| | 溝１南端 | （北から） |
| ＰＬ．４ | 調査区西南部 | （南から） |
| | 溝５全景 | （東から） |
| | 調査区西端部 | （東から） |
| ＰＬ．５ | 溝７遺物出土状況 | （北西から） |
| | 溝７遺物出土状況 | （北から） |
| | 溝１断面 | （北から） |
| ＰＬ．６ | 流路１北西部遺物出土状況 | （西から） |
| | 落ちこみ１遺物出土状況（D10－18T付近） | |
| | 落ちこみ２遺物出土状況（D15－4Q付近） | |
| ＰＬ．７ | 流路１垂直写真 | |
| | 流路１細部 | （西から） |
| | 流路１細部 | （南から） |
| ＰＬ．８ | 流路１細部 | （北から） |
| | 流路１南壁 | （北から） |
| | 流路１西壁 | （東から） |
| ＰＬ．９ | 樋門付近全景 | （南から） |
| | 溝７全景 | （南西から） |
| | 溝７南側遺物出土状況 | （北から） |
| ＰＬ．10 | 溝７北側遺物出土状況 | （南西から） |
| | 同 | （北東から） |
| | 同 | （上から） |
| ＰＬ．11 | 落ちこみ２断面（D15－4Q付近、東から） | |
| | 溝５北側断面（D15－8R付近、東から） | |
| | 溝７直上南北断面 | （東から） |
| ＰＬ．12 | 溝１ | |
| | 溝７ | |
| ＰＬ．13 | 溝７ | |
| | 落ちこみ２ | |
| ＰＬ．14 | 落ちこみ２ | |
| | 流路１北西部 | |
| | 溝３ | |
| | 黒灰色土 | |
| ＰＬ．15 | 溝３ | （上から） |
| | | （横から） |
| | | （下から） |
| ＰＬ．16 | 製塩土器 | |
| | 土錘 | |


# 付　図　目　次


男里遺跡平面図（1/250）

府営地域総合オアシス整備事業に伴う

# 男里遺跡発掘調査概要・II

上林史郎

## 第１章　調査にいたる経過（fig.１，２）

大阪府の泉州沖に位置する関西国際空港から東南へ約６km、泉南市の南部に男里遺跡は所在する。遺跡は、男里川の東、双子池を中心として東西約1.1km、南北約1.3kmの範囲に広がっている。遺跡のほぼ中央に位置する双子池は、大阪市内から和歌山市に向かう国道26号線から北西へ約0.8km、府道堺・阪南線から南へ約0.1km、現在の海岸線までは約１kmと泉南地区においては交通至便の地にある。

遺跡周辺の地形は、和泉山脈から海岸線に向かって派生する丘陵、洪積段丘が大部分を占めており、沖積地は市域を区分している樫井川及び金熊寺川下流域に限定されている。

このような地形的制約から、従来より本地域の農業用水の確保は、専ら溜池を中心とした水路網によるものであった。その上、泉南地区の溜池の築造年代は古く、築造以来、部分的に改修を行い維持管理に努めてきたが、近年堤体の老朽化による漏水及び洪水吐、取水施設の老朽化が顕著となり、防災上危険な状態になっていた。このため、大阪府農林水産部では、溜池改修による防災安全度の向上や、農業用水の確保及び合理化と維持管理労力を低減するとともに、地域に潤いを与える水辺環境の保全を図ることを目的とする「地域総合オアシス整備事業」を計画した。

本地区の溜池は、金熊寺川流域の水田の主要な水源として機能しており、農業用水としての利用の他に防火用水や生活用水としても機能し、また地域用水としても重要な水源となっており、溜池群として一体的に整備する必要があった。男里地区においては、農業用水の確保は双子池にあたる。

今年度の調査地は、平成７年度、大阪府泉州耕地事務所が「地域総合オアシス整備事業」の一環として、堤体改修工事を実施した双子池下池の西南部（９５－池、幅約７ｍ、長さ約78ｍ、面積約550㎡）の南（II区、面積約30㎡）と北及び北東部分（Ｉ区、幅６～７ｍ、総延長約170ｍ、面積約1,000㎡）である。Ｉ区の平面形態は、

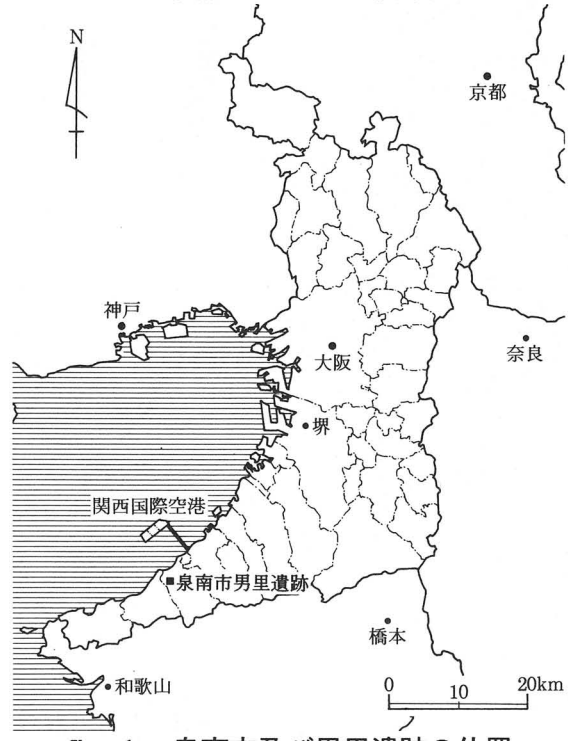



fig. 1　泉南市及び男里遺跡の位置

逆L字形を呈し、さらにその北辺西寄りから北へ抜ける樋門部分も含んでいる。さて、男里遺跡周辺では、数多くの調査が実施されてきた。(fig. 2) それらには、本調査のような双子池堤体改修工事に伴う調査（大阪府教委担当)、個人住宅を対象とした国庫補助事業の調査（泉南市教委担当)、マンションなどの民間開発に伴う調査（泉南市教委担当)、農業用水路掘削のための調査（泉南市教委担当)、双子池の東側を東南から北西へ抜ける空港関連新道の主要地方道泉佐野・岩出線建設に伴う調査（財団法人大阪府埋蔵文化財協会・同大阪府文化財調査研究センター担当）などがある。それらの調査成果については、未発表資料が多く、ここでは詳述しない。なお、調査の実施及び本書の作成にあたっては、蔵田弘幸、蒲生徹幸、藤野渉、広岡隆憲、奥田　桂、出合　明、北村美紀、河本直子、古下佳代子、河本美穂の援助を得た。また、松村隆文、森屋直樹、山田隆一、中村淳磯、石橋広和、城野博文、河田泰之、大野路彦の諸氏から教示、協力をうけた。記して感謝します。

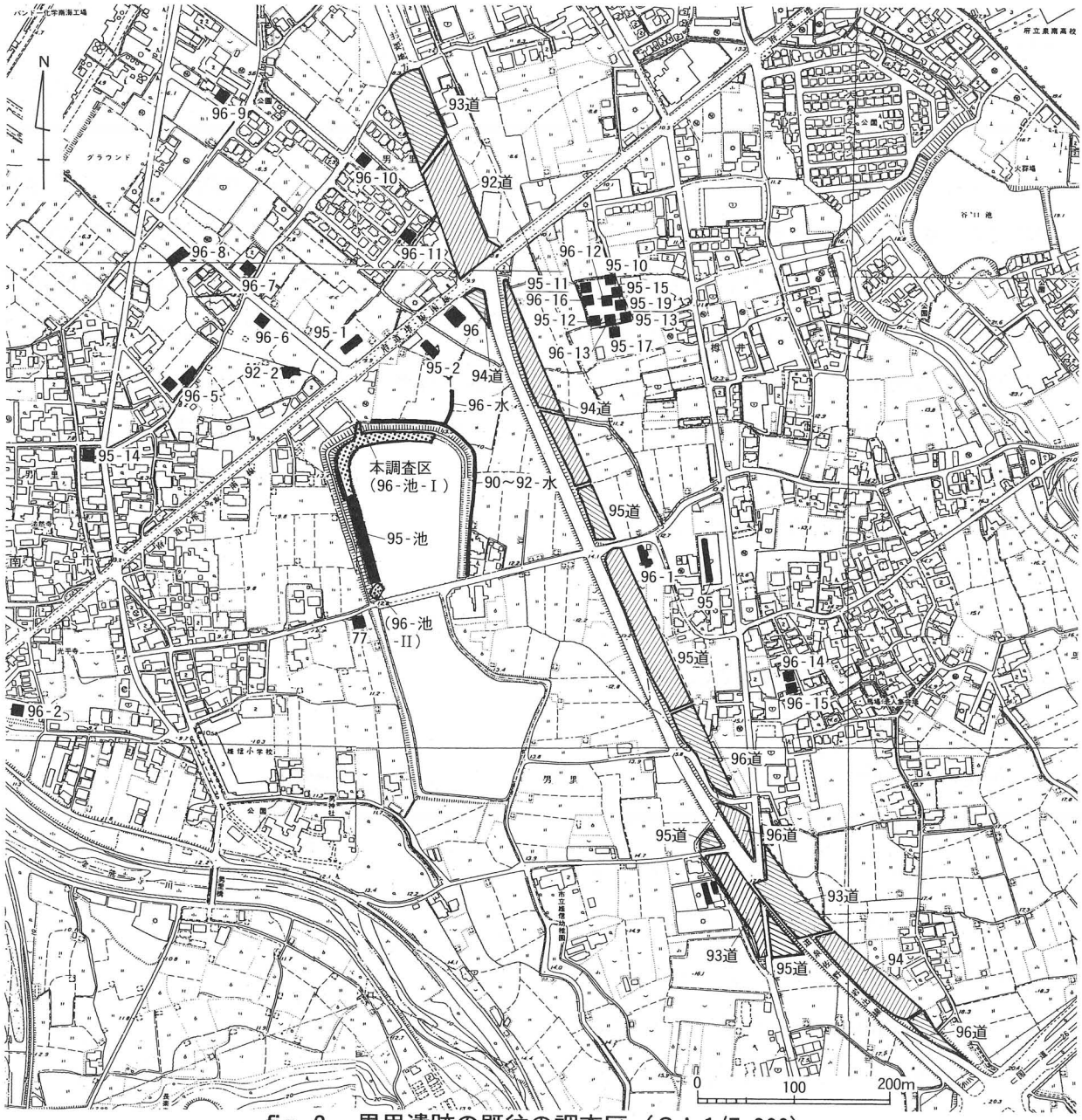



fig. 2　男里遺跡の既往の調査区（S≒1/7,000）

# 第２章　調査の方法（fig.３）

ため池の堤体改修といった狭長な調査区の発掘にあたっては、統一的な調査用基準線を設定することが必要である。調査区の地区割りについては、現在、泉南市教育委員会が採用しているものを使用した。すなわち、国土座標第Ⅵ系の座標値表示のもの（1/2,500の地図）を使用し、それを500m四方に分割し、Ａ～Ｌ（12分割）までわける。さらに、500m四方のものを100m四方に分割し、枝番号１～25（25分割）を追加する。100m四方のものを５m四方（400分割）にわける。Ｘ軸はＡ～Ｔ、Ｙ軸は１～20である。

このようにして設定された杭は、実測用の基準線であり、また遺物の取り上げに際しての出土地区にもなる。遺物の取り上げに際して、その地区の杭番号は、北西角の杭番号によって代表させることとした。地区割りは、その北西隅角の杭を起点として、算用数字とアルファベット大文字の組合せにより表記し、南北－東西の組合せによって地区名とした。例えば、斜線部で出土した遺物の地区番号は、北西隅角によってその地区を代表させるということから、Ｌ25－20Ｔになる。なお、東西軸については、１Ａ～１Ｔの次は２Ａ～２Ｔ、３Ａ～３Ｔという風になる。

方位については座標北、標高についてはＴ．Ｐ．（東京湾標準潮位）を使用した。

土層の名称及び土器の色調は、小山正忠・竹原秀雄編『新版標準土色帳』1992年版、農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修のものを使用した。本遺跡で検出された各遺構については、記号による略語を使用しないで、漢字による表記とした。

また、土器の縮尺は出来上がりが１／３、遺構図のトーンは斜めのレンガが地山を、斜線は検出面を表現している。遺物の断面のトーンについては製塩土器を、黒塗りは須恵器を表現している。以上のようにして調査を進めることとなった。

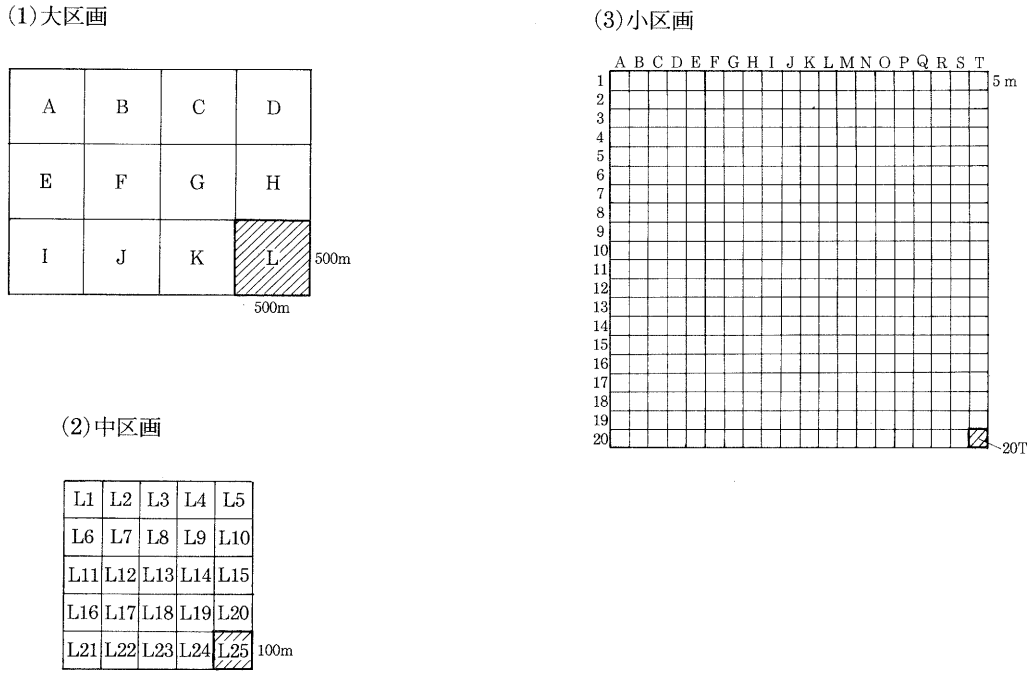



fig. 3　調査区の地区割り

# 第３章　男里遺跡をめぐる環境（fig.４）

本章では、男里遺跡を中心として、旧石器時代から中世までその考古学的環境を素描してみたい。

旧石器時代の遺物と考えられるものに、本遺跡の東南約２kmの丘陵上に立地する滑瀬遺跡㉗出土のナイフ形石器がある。

縄紋時代では、草創期の遺物が若干出土している。すなわち、滑瀬遺跡や本遺跡の南約２kmに立地する阪南市玉田山遺跡㊽からは有舌尖頭器が、また北東約2.5kmの海営宮池遺跡⑦からは木葉形尖頭器が出土している。さらに、北東約2.5kmの岡田東遺跡⑭からは、早期後半にあたる押型文土器が出土しており、泉州地域における最古級の土器と考えられる。縄紋土器の出土は、前期がフキアゲ山東遺跡で、後期が岡田東遺跡や泉佐野市三軒屋遺跡で確認されている。次に、縄紋時代晩期における本地域の動向は、本遺跡の北東約５kmに位置する樫井川流域の三軒屋遺跡で集落の一部が確認され、本遺跡や泉佐野市船岡山遺跡、岡田西遺跡⑱などでも土器が出土している。このことによって、低地に集落を営む傾向を指摘することができる。それらは樫井川流域、樫井川河口付近の段丘上、男里川流域の三地域に大別される。

弥生時代になると、本遺跡の北東約2.2kmの海浜部に、氏の松遺跡⑳が出現する。氏の松遺跡では棟持柱をもつ小規模な（25㎡以下）掘立柱建物が５棟検出され、時期的には弥生時代前期新頃と考えられている。泉州地域では最古級に属する建物群であろう。弥生時代中期においては、泉南地域の拠点的集落が確認されている。樫井川流域の三軒屋遺跡、男里川流域の本遺跡がそれにあたり、最近の調査の進展により、集落の実体が徐々に明らかになりつつある。中期後半になると、船岡山遺跡のような従来みられた沖積段丘上に立地するものとは別に、東南部の丘陵上に集落が出現する。樫井川左岸の丘陵上に位置する新家オドリ山遺跡、その東南に位置する棚原遺跡、金熊寺川の丘陵上に位置する滑瀬遺跡などである。また、沖積段丘上に位置する集落は、後期まで存続するが、新たに丘陵上に出現する集落は後期初頭になると廃絶する。次に、弥生中期における墓制の状況が数例確認されている。樫井川流域の三軒屋遺跡や諸目遺跡、向井山遺跡においては方形周溝墓が検出され、男里川流域の本遺跡では木棺墓が確認されている。また、本遺跡の南西約1.4kmに立地する神光寺遺跡でも方形周溝墓が検出されている。以上、本地域の遺跡は弥生時代中期以降、概ね樫井川流域と男里川流域の二群によって大別される。なお、本遺跡の南西約２kmの愛宕山からは扁平紐四区袈裟襷文銅鐸が出土しており本遺跡との関連が興味深い。

古墳時代では、岸和田市北部の摩湯山古墳周辺を除いて泉南地域に前期古墳は存在しない。本地域における古墳の出現は、岬町淡輪の大型前方後円墳である西陵古墳、宇度墓古墳まで待たねばならない。ただ、両古墳は５世紀前葉頃に相次いで築造されているが、在地勢力によるものではなく、紀ノ川下流域を本拠とする紀氏の墳墓と考えられている。それら以外では、大部分が５世紀後半以降に築造された小規模な円墳である。すなわち、樫井川流域の丘陵上にはフキアゲ山

古墳群、新家古墳群、兎田古墳群が、金熊寺川流域の丘陵上には高田山古墳群㊴が立地するという二群に大別される。なお、低地に位置する三軒屋遺跡では、上部を削平された数基の古墳が検出されている。古墳時代の集落は、前期の三軒屋遺跡、船岡山遺跡において竪穴式住居が検出されている。後期になると、岡田東遺跡⑭では後期の造付けのカマドを備えた竪穴式住居が検出されている。本遺跡でも集落に関連する前期の大規模な溝や河道が確認されている。

飛鳥～平安時代の集落は、本遺跡や泉佐野市湊遺跡などにみられる。これらの低地に営まれた集落とは別に、古代寺院の海会寺⑥や泉佐野市禅興寺が相次いで建立される。海会寺は、樫井川左岸の洪積段丘上に同時期の集落を伴って出現する。海会寺は法隆寺式の伽藍配置をもち、山田寺式や川原寺式の軒丸瓦が出土している。なお、禅興寺については、遺構が未確認であり、その実体については明確ではないが、これまでの調査で川原寺式、山田寺式、紀寺式の軒丸瓦が出土している。史料から勘案してもその存在は確実であろう。これらの新たな集落や寺院の出現は、本地域における大きな社会的画期となる。特に、寺院の建立については、遺跡の状況から在地の勢力によるものとは考えられず、新来の勢力の所産になるものと想定される。

律令体制下、泉南地域は元来、河内国日根郡であり、その後河内国から分割され、和泉監日根郡、757年に和泉国日根郡になる。和泉国日根郡は、近義・賀美・呼吸・鳥取の四郷から形成され、本遺跡周辺は呼吸郷にあたる。

さて、泉南地域においてその面積の大半を占める洪積段丘へと開発が広がるのは、平安時代末頃であろう。本遺跡の北に近接して戎畑遺跡㊷が海浜部に立地している。ここでは、平安時代頃の潅漑用の大溝や鎌倉時代の掘立柱建物が検出されている。また、鎌倉時代の真蛸壺を焼いた窯跡や粘土取りの土坑も多数検出されている。なお、掘立柱建物の中には、住居以外の作業場や倉庫、工房などの存在も指摘されている。さらに、信達の林昌寺では、緊急調査の結果、標高約60ｍの竹林でほぼ垂直に削りとられたロストル式の瓦窯が１基検出されている。その断面観察によれば、焼成室奥壁や煙道部分が現存しているという。出土遺物には平安時代末期に属する複弁蓮華文軒丸瓦や丸・平瓦などがある。

鎌倉時代以降、集落は段丘面の開発に伴って拡大していく。それらは、現存する村落と重なっており、徐々に現在の景観が形成されていったものと考えられる。

参考文献


・泉南市役所『泉南市史・通史編』1987
・（財）大阪府埋蔵文化財協会『滑瀬遺跡』1987
・泉佐野市教育委員会『三軒屋遺跡』1993
・河田泰之「位置と環境」，泉南市教育委員会『岡田西・氏の松遺跡発掘調査報告書』1995
・泉南市教育委員会『泉南市文化財年報№.１』1995
・泉南市教育委員会『泉南市遺跡群発掘調査報告書ＸⅢ』1996
・泉南市教育委員会「戎畑遺跡発掘調査現地説明会資料」1996.９

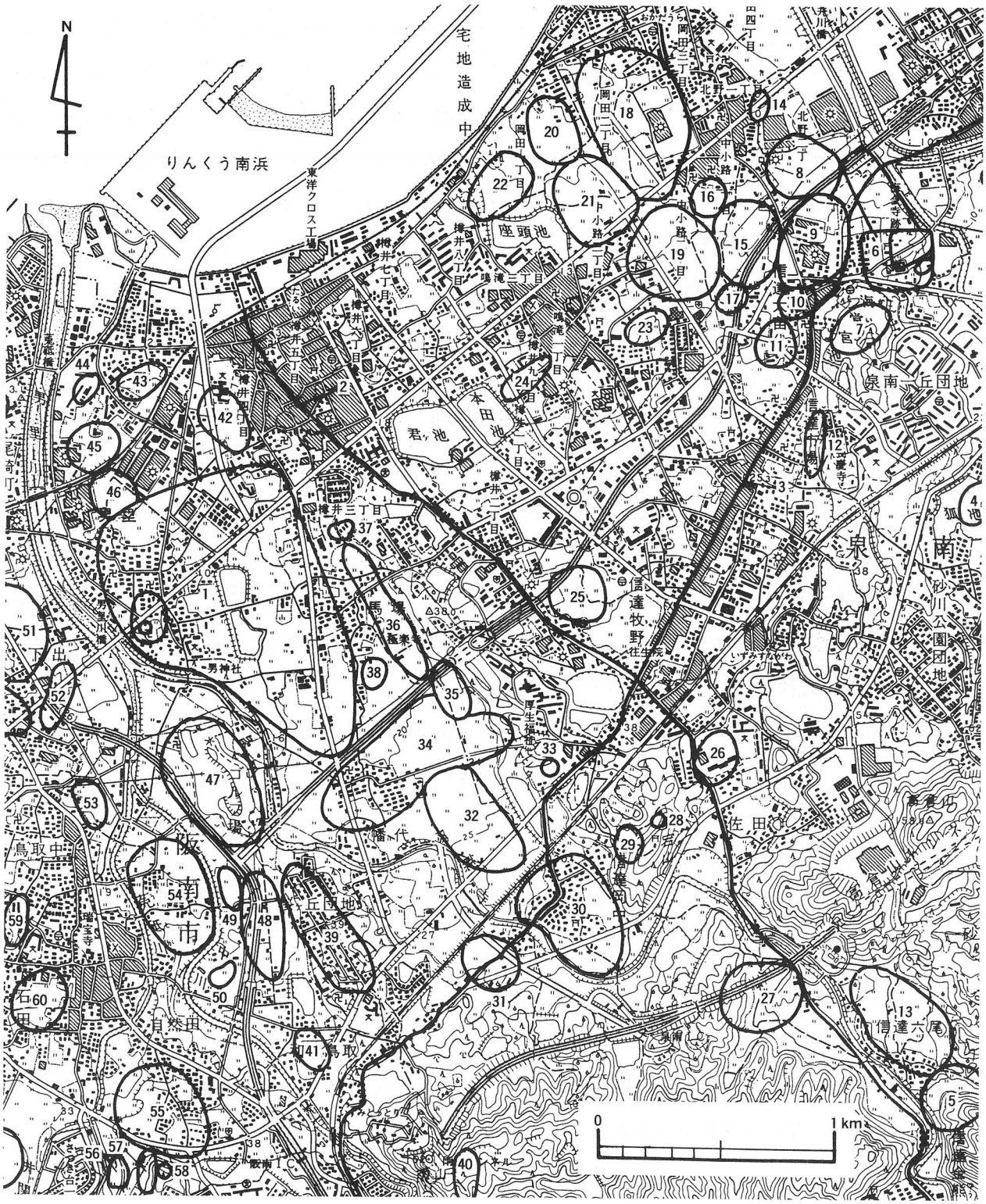



fig. 4　遺跡分布図（S＝1/25,000）国土地理院複製図による

1．男里遺跡
2．根来街道
3．熊野街道
4．狐池遺跡
5．六尾南遺跡
6．海会寺跡
7．海営宮池遺跡
8．新伝寺遺跡
9．北野遺跡
10．大苗代遺跡
11．仏性寺跡
12．市場遺跡
13．六尾遺跡
14．岡田東遺跡
15．中小路遺跡
16．中小路北遺跡
17．中小路南遺跡
18．岡田遺跡
19．中小路西遺跡
20．氏の松遺跡
21．岡田西遺跡
22．座頭池遺跡
23．坊主池遺跡
24．本田池遺跡
25．上代石塚遺跡
26．信之池遺跡
27．滑瀬遺跡
28．林昌寺銅鐸出土地
29．林昌寺跡
30．岡中遺跡
31．岡中西遺跡
32．幡代南遺跡
33．奥ノ池遺跡
34．幡代遺跡
35．前田池遺跡
36．長山遺跡
37．男里東遺跡
38．山ノ宮遺跡
39．高田山古墳群
40．雨山南遺跡
41．和泉鳥取遺跡
42．戎畑遺跡
43．天神ノ森遺跡
44．キレト遺跡
45．高田遺跡
46．男里北遺跡
47．平野寺跡
48．高田遺跡
49．久保田遺跡
50．高田西遺跡
51．馬川遺跡
52．下出北遺跡
53．室堂遺跡
54．向出遺跡
55．自然田遺跡
56．寺田山遺跡
57．玉田山上円下方墳
58．玉田山遺跡
59．正方寺遺跡
60．西畑遺跡

# 第４章　調査の成果

今年度の調査で検出された主要な遺構には、弥生時代後期～古墳時代前期の溝・落ちこみ、飛鳥～奈良時代の流路「しがらみ」・溝などがあり、主要な遺物には、弥生土器、古式土師器、須恵器、製塩土器、蛸壺、土師器、黒色土器、瓦器などがある。

## 第１節　基本層序及び遺構面の概略（fig.５）

本調査区（Ｉ区）では、深掘り部分も含めて最大約3.2m（T.P＋10m～6.8m）までの発掘調査を実施した。この間の土層は、種々の砂、砂質土、粘質土、シルト、粘土よりなるが、形成過程がほぼ同一と考えられるものを一括して基本土層としてまとめた。なお、Ｉ区の調査は、樋門部分と堤体部分を分けて実施したため、一連の土層断面は掲載できなかった。すなわち、樋門調査区は東壁（断面Ｄ）と南壁（断面Ｃ）、堤体調査区は西・北壁（断面Ａ）及び北壁（断面Ｂ）である。また、II区は池の新しい用水管を布設される部分の調査区であったが、調査の結果、旧の埋管の掘り方によって地山付近までの大部分が削平をうけており、遺構・遺物については明確ではない。II区の土層断面については、fig.23の上段に掲げた。

Ｉ区の層序は、断面Ａの南端部の地山がT.P.＋９ｍと高く、杭№D15－11Sを境に北側へ急激に下降している。古墳時代前期頃の包含層である②黒褐色シルトは、層厚0.2～0.4mで杭№D10－20付近まで約55m伸びている。また、この②黒褐色シルトは、溝１の上層埋土にもなり、断面Ｂの西端から東へ約30mのところまで伸びている。それより東は地山が上昇している。要するに、Ｉ区の南端と東端の地山が高く、その間は樋門部分を中心にして地山が下降し、東南から北西へ流れる流路「しがらみ」や溝、落ちこみなどの遺構が集中しているのである。また、溝５や落ちこみ２の遺構埋土である⑨淡黒色粘質シルトは比較的多く庄内式期の土器を含んでいる。

次に、断面Ｂや断面Ｃの⑮灰オリーブ色シルトには、飛鳥～奈良時代の土器が含まれており、その下層は流路１「しがらみ」の埋土にもなっている。さらに、断面Ｂの⑱青灰褐色シルトは、瓦器皿を含んでおり、中世の包含層に相当するものと考えられる。

遺構面については、本調査区が沖積地にあたるため、各時代の面が青灰色粘質土などを介して検出されるものと考えられるが、⑦オリーブ灰細砂より上層は遺構や遺物がほとんどみられない。まれに、土師器や黒色土器の細片が出土するのみで、土層の形成時期については明確ではなかった。ただ、断面Ｂの⑱青灰褐色シルトから、比較的残りのよい瓦器が出土したことから、この層は鎌倉時代後葉頃に形成されたものと考えられる。さらに、断面Ａの⑭灰色シルトには、飛鳥～奈良時代の土器が含まれており、この下層が飛鳥時代の遺構面にあたる。すなわち、⑭層から⑱層までが、奈良～鎌倉時代に相当することになる。さらに、②黒褐色シルトの直下層が古墳時代前期頃の遺構面になる。なお、現双子池の堤体については、発掘調査の結果から、鎌倉時代以降に形成されたものと考えられ、従来言われていたような平安時代中葉頃に遡るものではない。なお、双子池自体も元来大きな河川の中に包括されるものであろう。

## 第２節　弥生時代後期～古墳時代前期の遺構と遺物

### Ａ．遺構

当該期の遺構には、Ｉ区北東半部で検出された、溝１、溝７、西南半部で検出された溝５、落ちこみ１、落ちこみ２、ピット群などがある。なお、落ちこみ１と落ちこみ２は、本来的には一連のものと考えられる。

〔１〕溝１（fig.６,７）

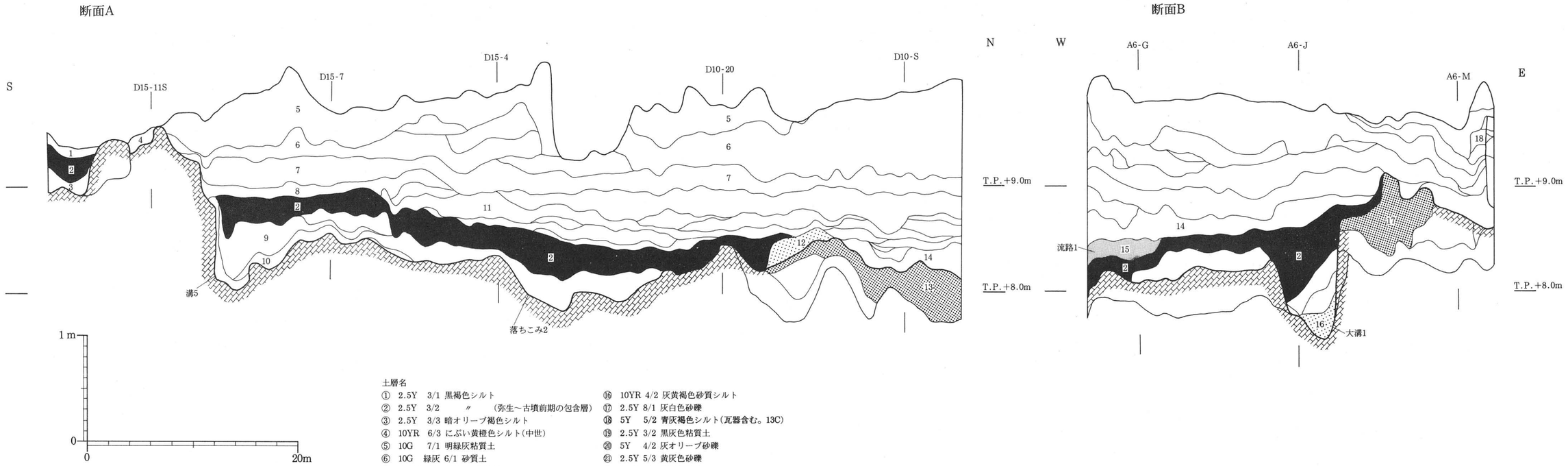
基本層序での⑰灰白色砂礫を切り込んで形成された人工の大溝で、Ｉ区の杭№Ａ６－15Jから杭№Ａ６－15K付近で検出された。溝の流路方向は、底面の勾配から考えて、東南から北西に向かって流れていたものと考えられる。溝の規模は、長14m以上、上面幅約４ｍ、下面幅約２ｍ、深さ約0.9mをはかる大規模なもので、若干の弧を描きながら南北に続いていくものと考えられる。溝底面のレベルは、T.P.＋7.5mをはかる。

溝１は、その北西部を溝７によって削平されており、全体的な溝の規模や堆積状況についてはわからないが、断面は逆台形を呈している。溝１の中央部に残した土層観察用あぜをみると、上から①②灰黄色粘質土（約0.15m）、③暗茶色粘質土（約0.4m）が堆積し、③層からは弥生後期から庄内式期の土器を含んでいる。ただ、溝最下層の④茶灰色砂質シルト（約0.35m）や⑤茶灰色砂質土（約0.25m）は、当該期の土器はほとんど含まない。

次に、この断面の埋土には砂礫や微砂がほとんど含まれていないが、調査区南壁の断面をみると、その最下層では砂礫や黒灰色系の粘質土が堆積している。すなわち、溝１内の堆積は一様ではなく、近接した範囲でもかなり様相を異にする。こういったことは、溝１内部が流水や滞水を繰り返していたことを物語っている。さらに、溝１の機能については、検出範囲が小規模なため明確ではないが、取・排水や集落域などを区画するものであろう。なお、出土遺物は弥生後期の土器（壺・高杯）や庄内式土器（壺・甕・台付鉢・小型器台）、製塩土器、土錘などが混在しているが、溝１の掘削時期については庄内式期と考えられる。

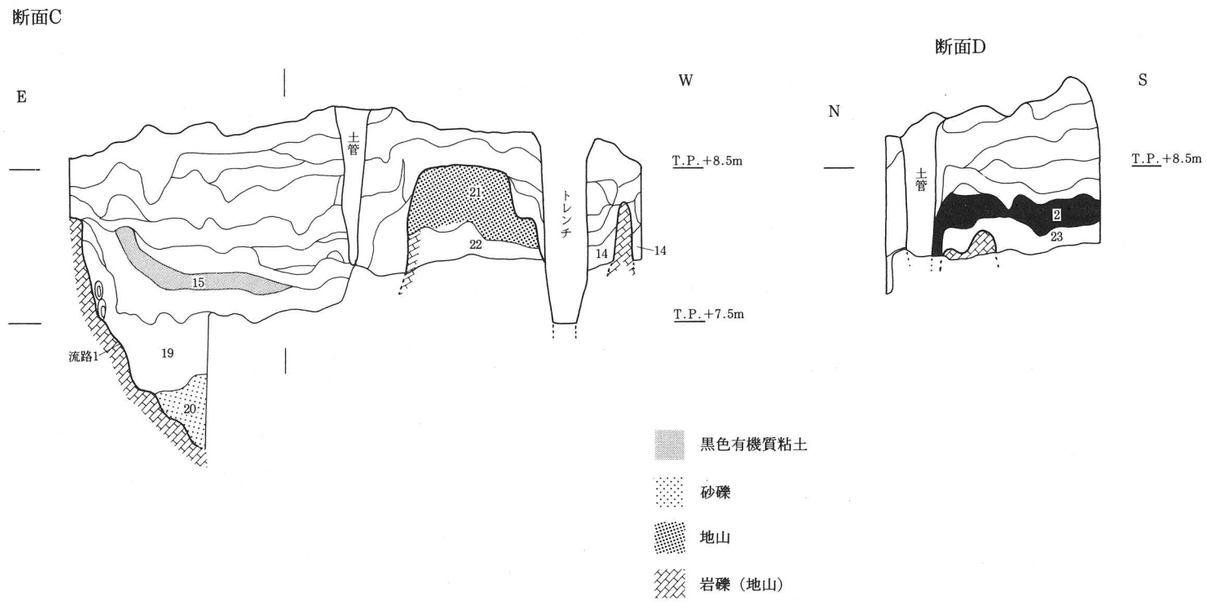
〔２〕溝７（fig.6～8）

溝７は、溝１の西側に位置し、やや弧を描きながらほぼ南北方向で検出された。溝の流路方向は、底面の勾配から考えると、南から北に向かって流れていたものと考えられる。溝７の規模は、長6.5m以上、上面幅約3m、下面幅約2.5m、深さ約0.45mをはかり、さらに南北に続いていくものと考えられる。溝底面のレベルはT.P＋7.9mをはかる。溝７は、溝１の北西部を削り込んで築造されている。溝の断面は浅い逆台形を呈し、溝内には上から②灰黄色粘質土（約0.1m）、⑥黒灰色粘質土（約0.2m）が堆積し、さらに下層の⑦暗灰色粘質シルト（約0.2m）からは庄内式土器、布留式土器や製塩土器などが混在して出土した。溝７内部における土器の出土状況については、その直上に南北方向の土層観察用のあぜが位置し、断面図作成後、あぜを除去したため、その部分の遺物の出土状況はわからない。ただ、それ以外では、杭№Ａ６－16Jの北西部に高杯や壺の破片がみられ、南半部では長さ約2.5m、幅約１ｍにわたって密に土器片が分布していた。




土層名

① 2.5Y 3/1 黒褐色シルト
② 2.5Y 3/2 〃 (弥生～古墳前期の包含層)
③ 2.5Y 3/3 暗オリーブ褐色シルト
④ 10YR 6/3 にぶい黄橙色シルト(中世)
⑤ 10G 7/1 明緑灰粘質土
⑥ 10G 緑灰 6/1 砂質土
⑦ 2.5GY 6/1 オリーブ灰細砂
⑧ 7.5Y 5/2 灰オリーブ細砂
⑨ 10YR 1.7/1 淡黒色粘質シルト
⑩ 7.5Y 4/1 灰色粘質シルト
⑪ 10YR 4/1 灰色シルト
⑫ 7.5Y 7/1 灰白色シルト
⑬ 2.5Y 4/3 オリーブ褐色細砂
⑭ 5Y 6/1 灰色シルト(飛鳥時代)
⑮ 5Y 5/3 灰オリーブ色シルト( 〃 )
⑯ 10YR 4/2 灰黄褐色砂質シルト
⑰ 2.5Y 8/1 灰白色砂礫
⑱ 5Y 5/2 青灰褐色シルト(瓦器含む。13C)
⑲ 2.5Y 3/2 黒灰色粘質土
⑳ 5Y 4/2 灰オリーブ砂礫
㉑ 2.5Y 5/3 黄灰色砂礫
㉒ 2.5Y 4/1 黄灰色微砂
㉓ 7.5Y 3/2 オリーブ黒シルト



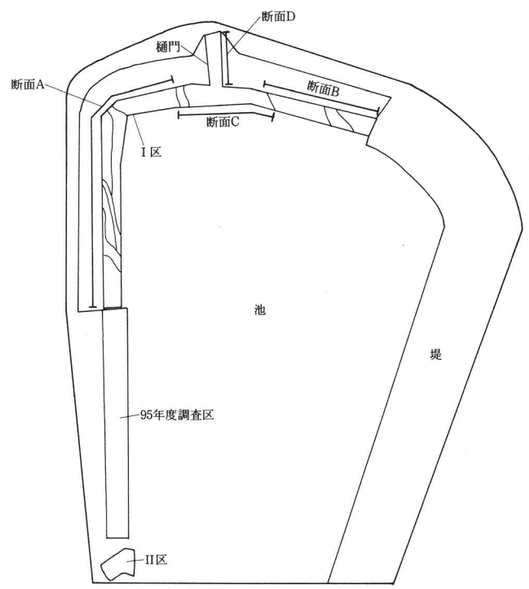




**fig. 5　調査区基本土層図（垂直1/40, 水平1/400）**

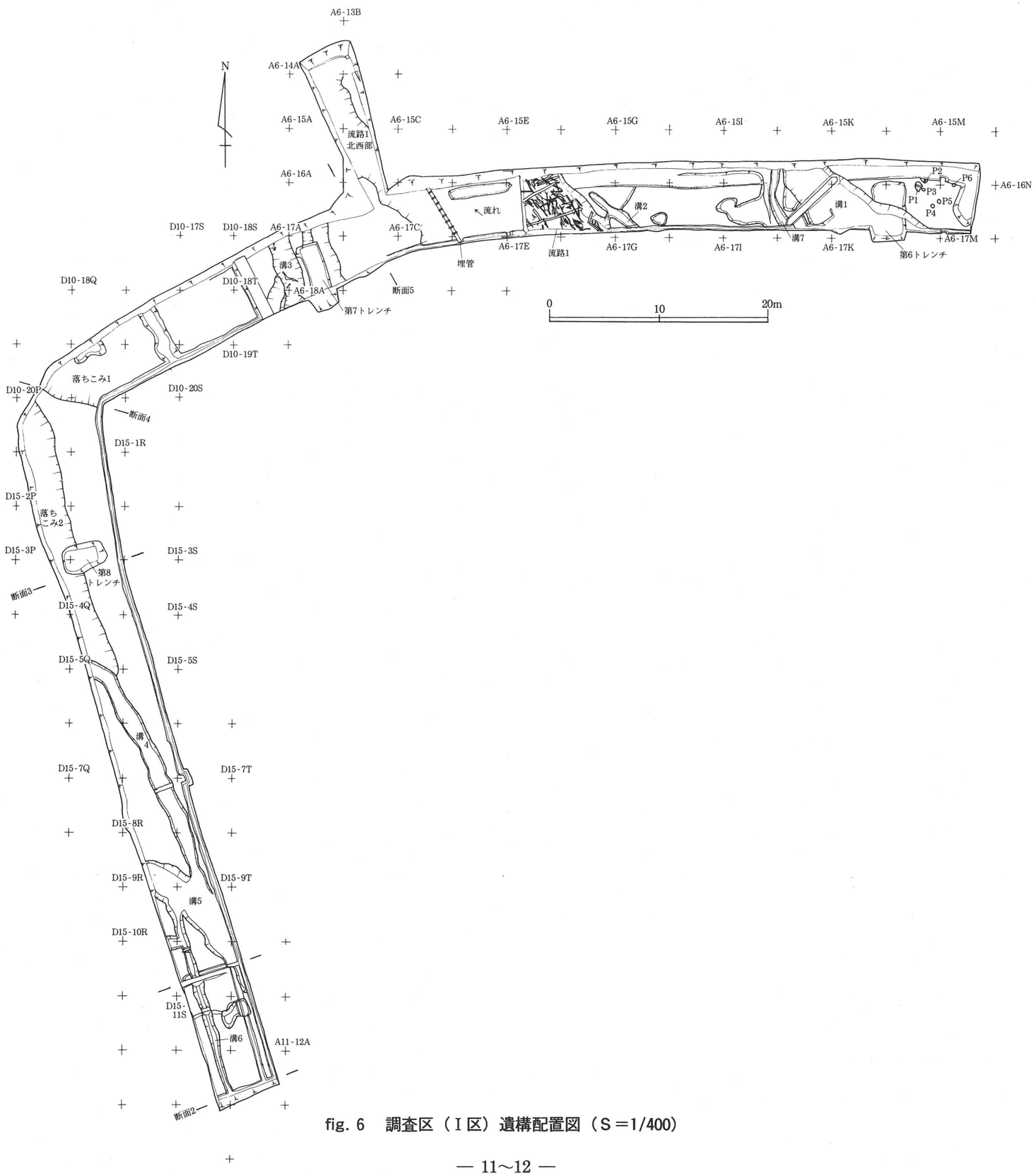
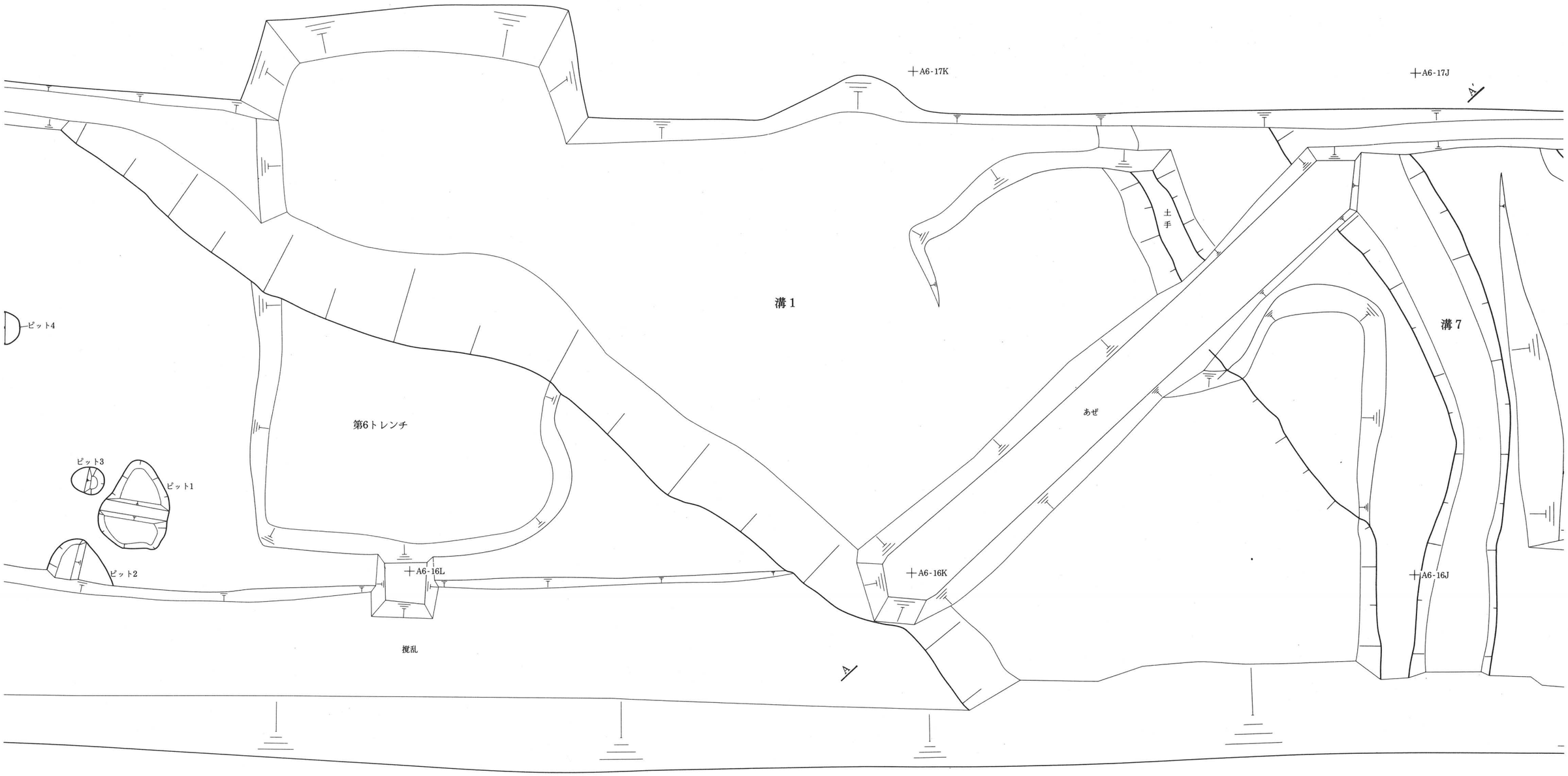
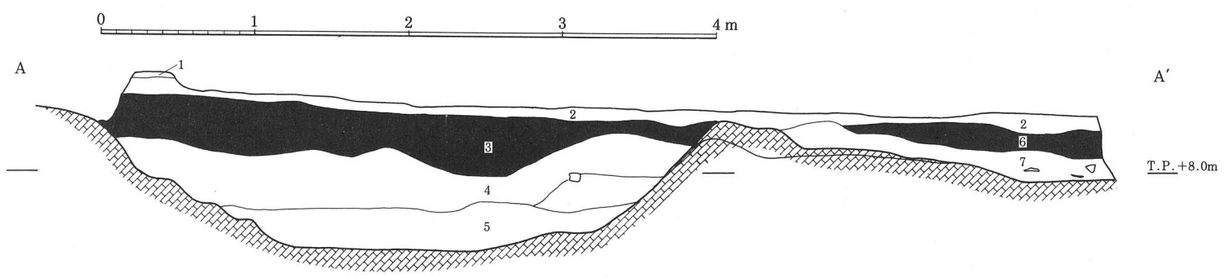



fig. 6　調査区（Ⅰ区）遺構配置図（S＝1/400）




土層名
1．淡黄色粘質土
2．　〃
3．暗茶色粘質土(土器含む)
4．茶灰色砂質シルト
5．茶灰色砂質土
6．黒灰色粘質土(土器を多く含む)
7．暗灰色粘質土(庄内～布留式土器を多く含む)

fig. 7　溝１、溝７の平面図及び断面図（S=1/40）

それらは、完形になるものは少ないが、壺、複合口縁壺、甕、台付椀、高杯、製塩土器（脚台）、蛸壺、土錘など、バラエティに富んでいる。また、炭片や炭化物片も混ざっていた。元来、溝７全体に土器片が列状に分布していたものと考えられる。

溝７の機能については、溝１のような取・排水用ではなく、何かを区画するものであろう。溝の時期は、出土土器から庄内式～布留式期と考えられる。

〔３〕溝５（fig.６）

Ｉ区の西南部、杭№D15－９Rから杭№D15－９Sにかけて検出された。溝５は東側に若干の弧を描きながら、東南から西北に向けて伸びている。その規模は、長さ15m以上、幅約3.5m、深さ約１mをはかる大規模なもので、底面のレベルはT.P.＋８mである。また、溝５の南肩については、砂礫層を穿って明確に肩を形成しているが、北肩についてはそれ以前の河川の浸食によって砂礫層が削られているため、判然としない。また、溝５の断面は逆台形を呈し、溝内には上から②黒灰色粘質土（約0.2m）が堆積し、さらに下層の⑨淡黒灰色粘質シルト（0.3～0.4m）からは庄内式土器、布留式土器や製塩土器などが出土している。ただ、溝埋土上層の②黒褐色シルト（約0.2m）は北側に伸びていき、落ちこみ２に続くものと考えられる。

溝５の機能については、溝１同様、取・排水や集落域などを区画するものであろう。また、溝の掘削時期についても庄内式期と考えられる。

〔４〕落ちこみ１（fig.６，９）

落ちこみ１は、調査区西端の杭№D10－20Pから杭№D10－17Tまで伸びている。その規模は、幅６m以上、長さ約23mをはかり、西南から北東方向に傾斜している。人為的な遺構というよりも河川が地山を浸食してその傾斜面に黒灰色砂礫やシルトが堆積したものである。ただ、杭№D10－18T付近では弥生土器や庄内式土器が、人頭大の河原石の集積と混じって出土している。

〔５〕落ちこみ２（fig.６）

落ちこみ２も杭№D15－５Sから北へ調査区西端の杭№D10－20P付近まで伸びている。その規模は、幅３m以上、長さ約26m以上にわたり、東から西に傾斜している。落ちこみ１同様、人為的な遺構というよりも河川が地山を浸食してその傾斜面に黒灰色粘質土やシルトが堆積したものである。杭№D15－4Q付近では弥生土器や庄内式土器が比較的まとまって出土している。それらには、複合口縁壺、壺、高杯、甕、鉢、蛸壺、製塩土器などがある。流されて溜まったものであろう。

〔６〕ピット群（fig.６）

Ｉ区の東端部、杭№Ａ６－16Lから杭№Ａ６－16Mにかけて、溝１の東肩から約２m離れたところで、６基のピットが検出された。ピット群は、地山である黄灰色粘質土を穿って構築されている。なかでも、ピット１は、長径約0.9m、短径0.7m、深さ約0.12mの楕円形を呈し、断面は浅い皿形である。埋土は暗茶灰色粘質土のみであり、遺物は全く出土していない。他のピットも同様であるため構築時期は明確ではない。ただ、T.P.＋8.5m前後でも遺存していることから考えると、溝１などと同一時期の可能性がある。集落に関連するピットかもしれない。

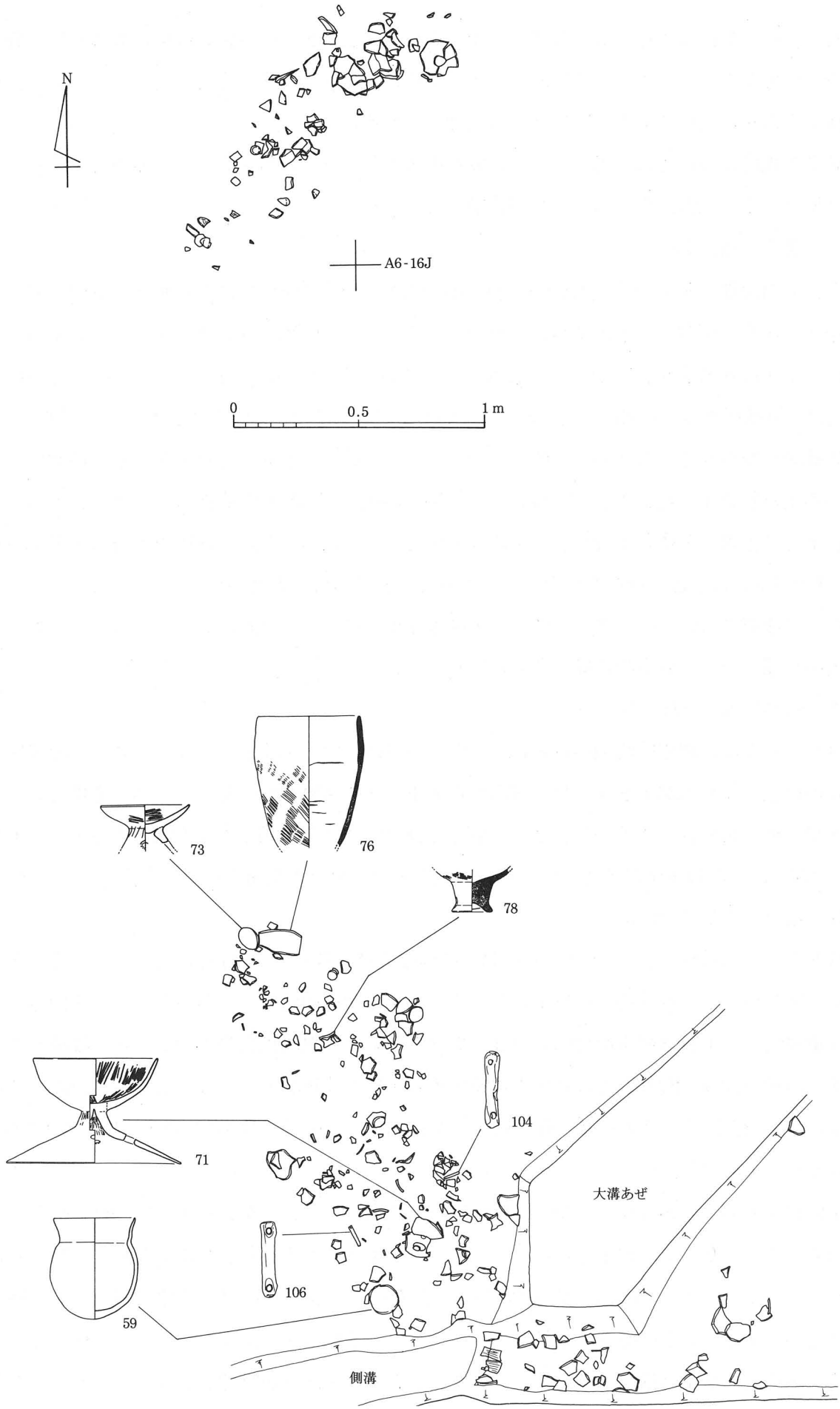



fig. 8　溝７遺物出土状況（S ≒1/20）

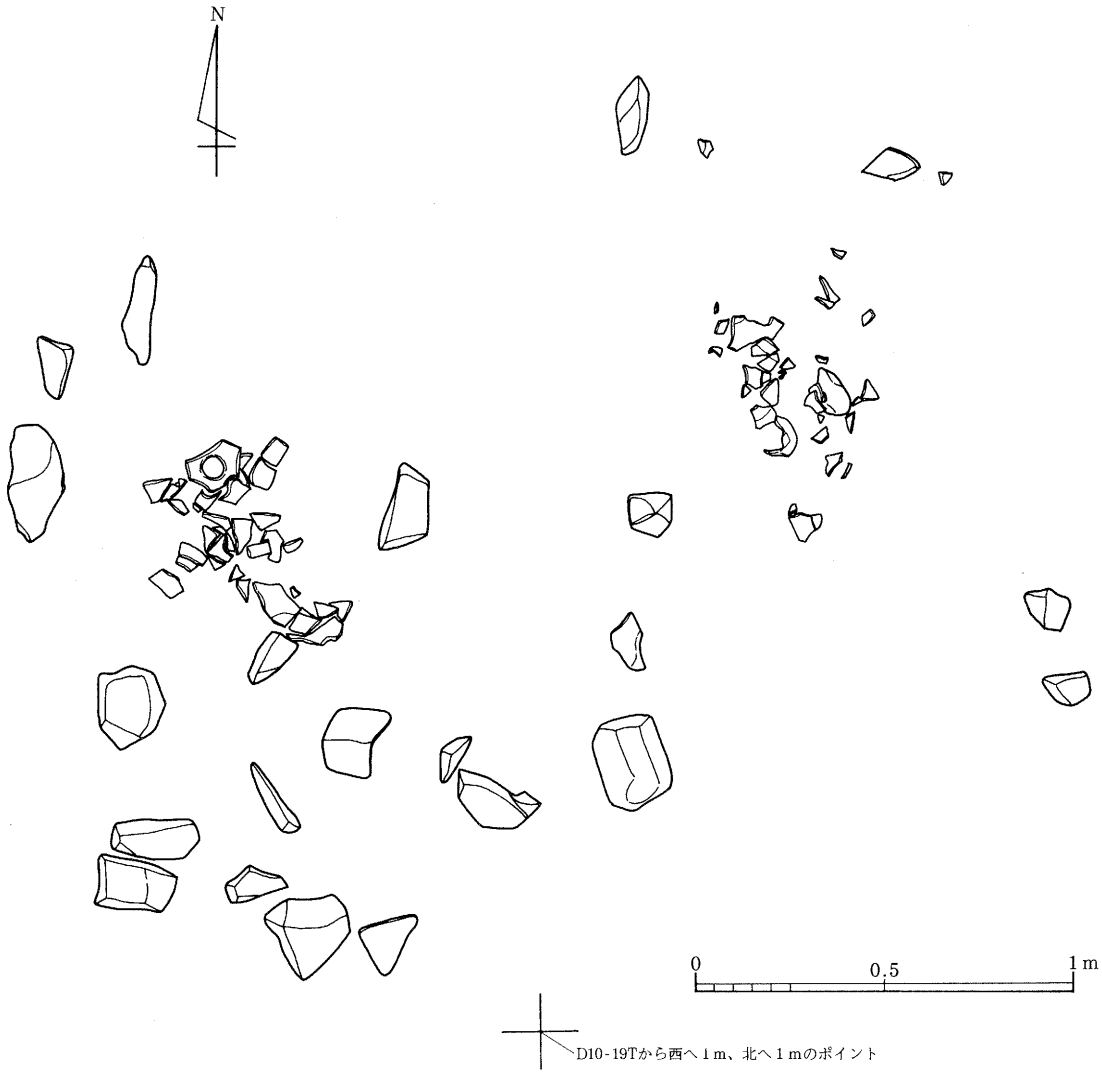



fig. 9　落ちこみ1遺物出土状況（S＝1/20）

B．遺物

〔1〕溝1出土土器（fig.10,11）

溝1からは、壺（1～3・6）、高杯（4）、鉢（5）、甕（8～13）、高杯（14～18）、台付椀（19・20）、小型器台（22）、製塩土器（23～45・52・53）、土錘（47～51）、須恵器平瓶の口縁部（54）、土師器皿（55・56）などがあり、弥生後期から奈良時代までの遺物が出土している。2は器表の摩滅が著しいが、口縁部下端に円形浮文をはりつけた加飾壺である。3は壺か甕の底部と考えられるが、外面は赤変し白色化している部分もあり、製塩に使用された土器と考えられる。4は全体的に摩滅しているが、弥生中期の高杯の脚柱部である。外面の上下には三条の沈線が施され、内面にはしぼり痕がみられる。5は布留式の鉢で、全体的に薄く仕上げている。口縁部は二段に外反し、端部は尖り気味。調整については摩滅しているがヘラミガキと考えられる。7の

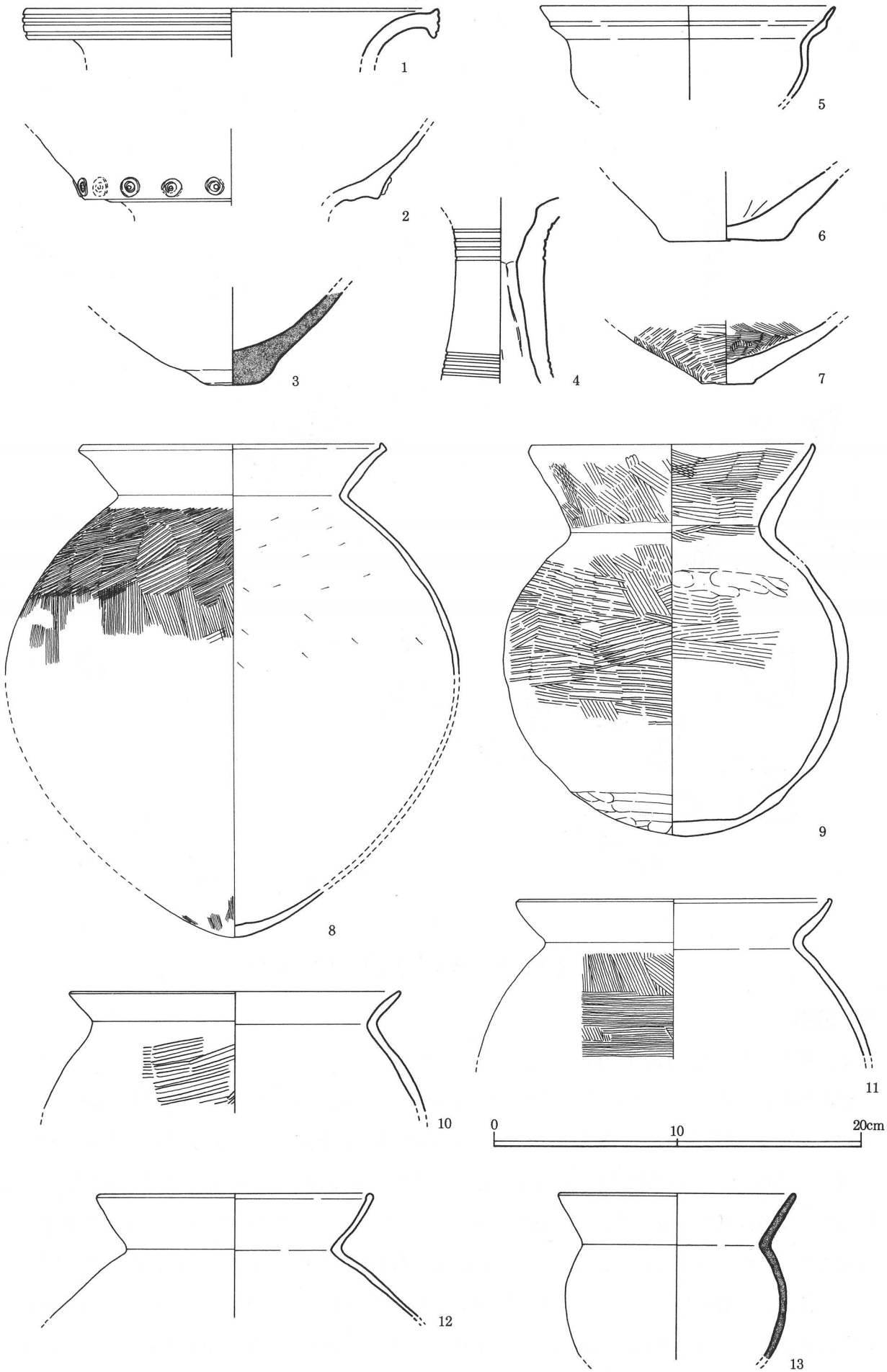



fig. 10　溝１出土土器①（S＝1/3）

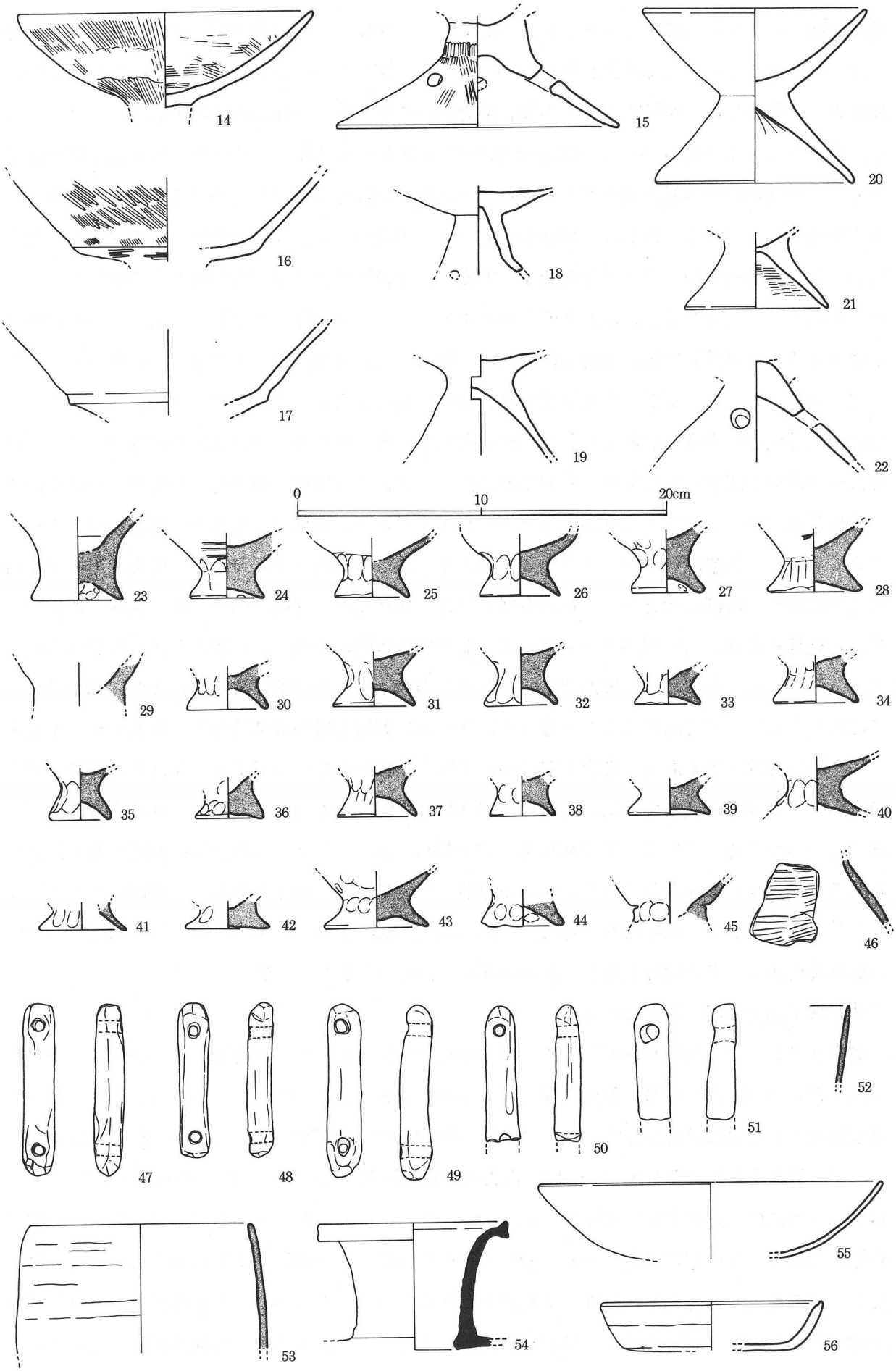



fig. 11　溝１出土土器②（S＝1/3）

甕は外面に左下がりの細かなタタキを、内面にはハケを施す。8は典型的な庄内甕である。口縁部はくの字形に外反し、端部を上方へつまみあげる。体部は丸味を帯び、底部は尖り底を呈する。体部外面は細かな左下がりのタタキの後、縦方向のハケを施す。体部内面は強いヘラケズリにより器肉をうすくし（約3mm）、また底部付近には指オサエが遺存している。胎土は生駒西麓産であり、中河内からの搬入品と考えられる。9の甕の口縁部は外反し、端部に面をもつ。体部は丸く底部も丸底である。外面は、口縁部が右下がりの荒いハケ、体部が不定方向のタタキ調整後荒いハケ、底部付近がヘラケズリを施す。内面は、口縁部及び体部中央が横方向の荒いハケ、それ以外はナデ調整である。11は典型的な布留甕である。口縁部はくの字形に外反し、端部は内側に肥厚する。体部外面は細かな縦方向のハケを施した後、横方向のハケを施す。体部内面はヘラケズリ調整と考えられるが、摩滅が著しい。13は小型の甕であるが、タタキが遺存していない。ただ、内外面とも赤変し製塩土器として使用された可能性がある。14は高杯の杯部である。口縁部はやや内湾し端部は尖り気味。外面は縦方向のハケ、内面は横方向のハケを施す。15は庄内式の高杯脚部である。基部から裾部へ外下方に真っすぐ伸び、端部は面をもつ。脚部には三方向のスカシを穿ち、調整は縦方向のヘラミガキである。20は台付椀と考えられる。椀部は真っすぐ斜め上方に伸び、端部に面をもつ。台部も斜め下方に伸びるが、端部は内湾し尖り気味。器肉は分厚い。椀部と台部とで相似形になっている。器表は全体的に摩滅し、台部にしぼり痕がみられるのみである。22は小型器台の脚部である。台部との接合痕跡が明瞭に残っているが、調整についてはわからない。三方向のスカシを穿っている。24は製塩土器の脚部である。外面にタタキを施し、それ以外はナデである。製塩土器については、脚部の破片のみである。46は甕の肩部の破片であるが、器表は赤変していた。製塩に使用された可能性がある。47～51は、棒状土錘で両端に紐穴を一つづつ穿っている。53は鉢状を呈する製塩土器で、外面には粘土紐の痕跡が明瞭に認められる。内外面とも赤変している。54は須恵器平瓶の口頸部の破片である。口縁部は上方へつまみだして立ち上がり、端部は尖り気味。外面には自然釉が付着している。56は土師器の皿である。口縁端部内側に一条の沈線を施す。体部外面は、回転ヘラケズリを施している。

〔2〕溝7出土土器（fig.12・13）

溝7からは、壺（59・66・67）、甕（60～65）、高杯（68～71）、小型器台（72・73）、台付椀（74・75）、蛸壺（76・77）、製塩土器（78～101）、土錘（102～107）などがあり、弥生中期から飛鳥時代までの遺物が出土している。67は弥生中期後半の大型鉢である。口縁端部外面は凹線文、その下に簾状文と列点文を施す。66は庄内式の複合口縁壺の破片であるが、端部は欠失している。口縁部下端には、波状文及び円形浮文を施している。57・58は甕の口頸部片で、内外面が赤変し、製塩に利用された土器と考えられる。60は小型の平底甕で、外面には木葉痕がある。口縁部は外反し、端部を丸くおさめる。体部は下膨れで、外面には左下がりのタタキが施される。61は卵形の体部をもち、尖り底である。口縁部は外反し、端部を丸くおさめる。体部外面上半は左下がりのタタキを施している。また、底部内面には指オサエが遺存している。63は甕の底部片で平底で

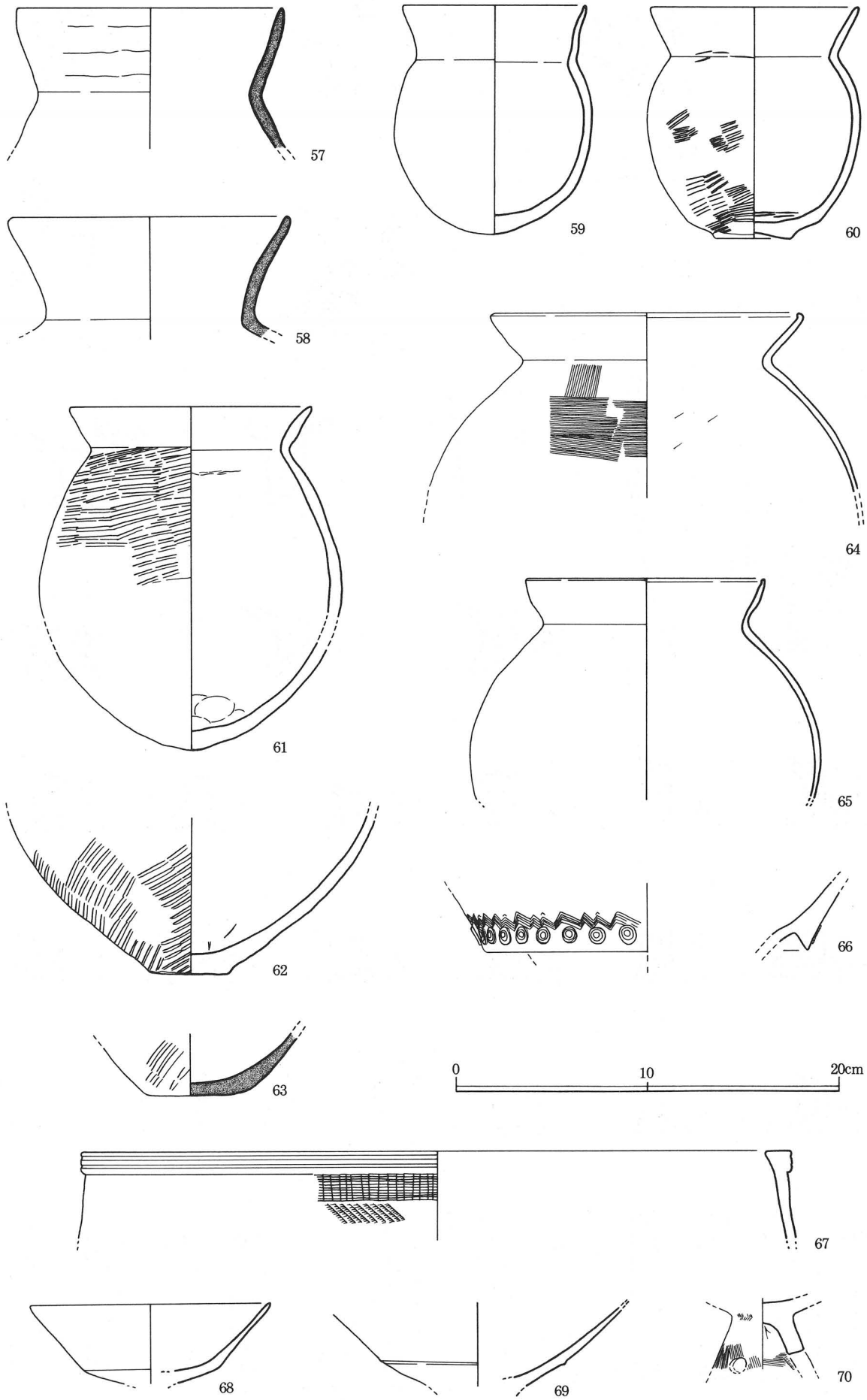



fig. 12　溝７出土土器①（S＝1/3）

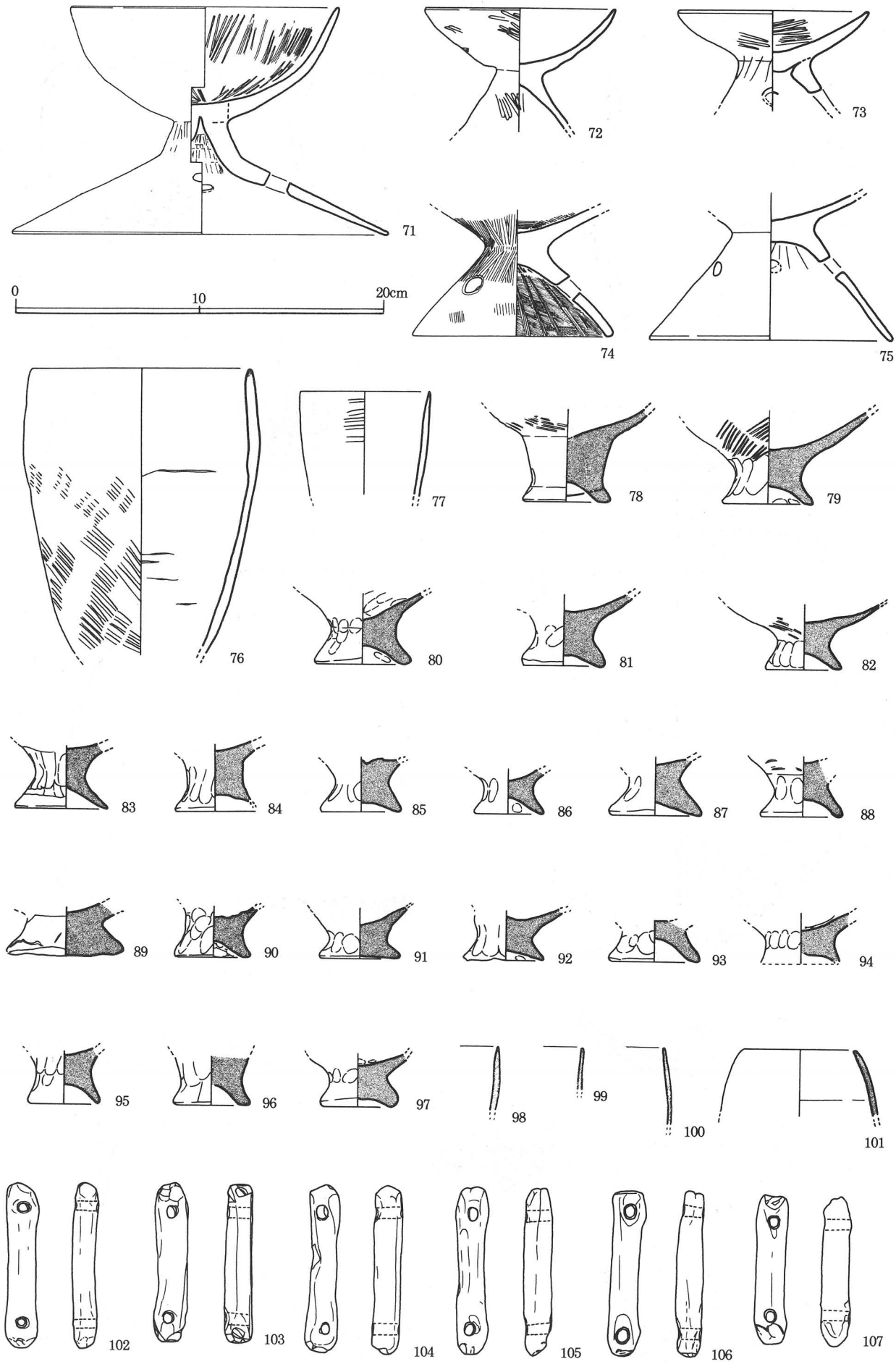



fig. 13　溝７出土土器②（S＝1/3）

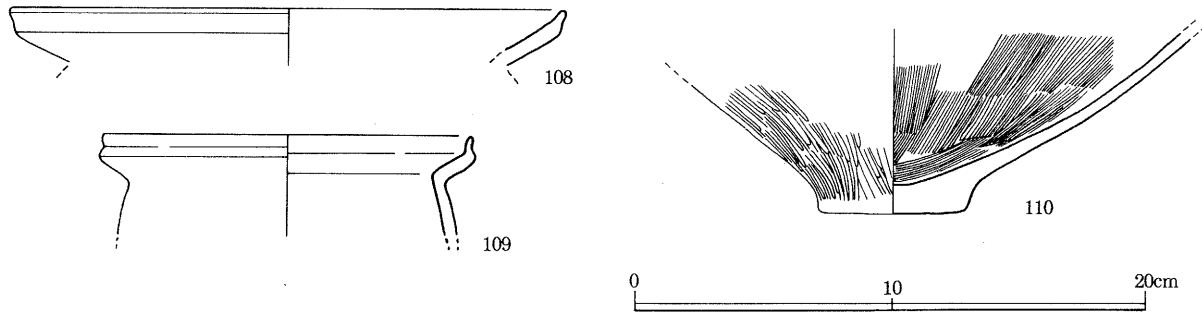



fig.14　落ちこみ１出土土器（S＝1/3）

ある。外面は左下がりのタタキを施している。内外面は赤変し、製塩土器として利用されたかもしれない。64は布留式の甕である。口縁部はくの字形に外反し、端部は内側に肥厚する。体部外面は細かな縦方向のハケを施した後、横方向のハケを施す。体部内面はヘラケズリ調整。68は高杯杯部である。口縁部は外上方に伸び端部は尖り気味。内外面はヘラミガキ調整。71はほぼ完形の高杯である。杯部は椀状である。口縁部は内湾し、端部を丸くおさめている。脚基部は太く短い。脚裾部はハの字状に開き、端部は丸い。杯部内面は整美な放射状暗文を施す。脚部外面は縦方向のヘラミガキ調整。脚部には４方向の円孔を穿つ。73は小型器台の杯部である。杯部は外上方に真っすぐ伸び、端部は角張り気味である。杯部内外面は横方向のヘラミガキ調整。皿状の杯部に粘土を押しつけながら脚部を形づくった痕跡が明瞭にわかる。脚部に円孔を穿っている。74は台付椀の台部であろう。外面は縦方向のハケ調整。台部内面は不定方向のハケ後、放射状の暗文。台部に３方向のスカシを穿つ。76は蛸壺である。口縁部は内湾し、端部を丸くおさめる。外面は口縁部がナデ、それ以外は右下がりのタタキを施す。内面はナデ仕上げ。79は製塩土器の脚部である。外面は左下がりのタタキ及び指オサエ。内面はナデ仕上げ。101は鉢状を呈する製塩土器である。器表は摩滅し内外面とも赤変している。102～107は、棒状土錘で両端に紐穴を一つづつ穿っている。

〔３〕落ちこみ２出土土器（fig.15）

落ちこみ２からは、壺（111・112・118）、甕（119）、高杯（113～117）、鉢（122・123）、蛸壺（121・125～132）、製塩土器（120・124）などがあり、庄内～布留式期の遺物が出土している。111は庄内式の複合口縁壺片である。口縁部外面には、剝離しているが二段に円形浮文の痕跡が認められる。113は高杯の杯部である。口縁部は強く外反し、端部は尖り気味。杯部下半は丸味を帯びる。内外面ともヘラミガキ調整と考えられる。123は小型の鉢である。口縁部は外反し、端部は丸くおさめる。外面はナデ、内面は横方向の板ナデがみられる。外面には一部、黒斑が遺存している。121は蛸壺で、口縁部は欠失している。体部外面は右下がりのタタキ、内面はナデ。体部下半に接合痕がみられる。

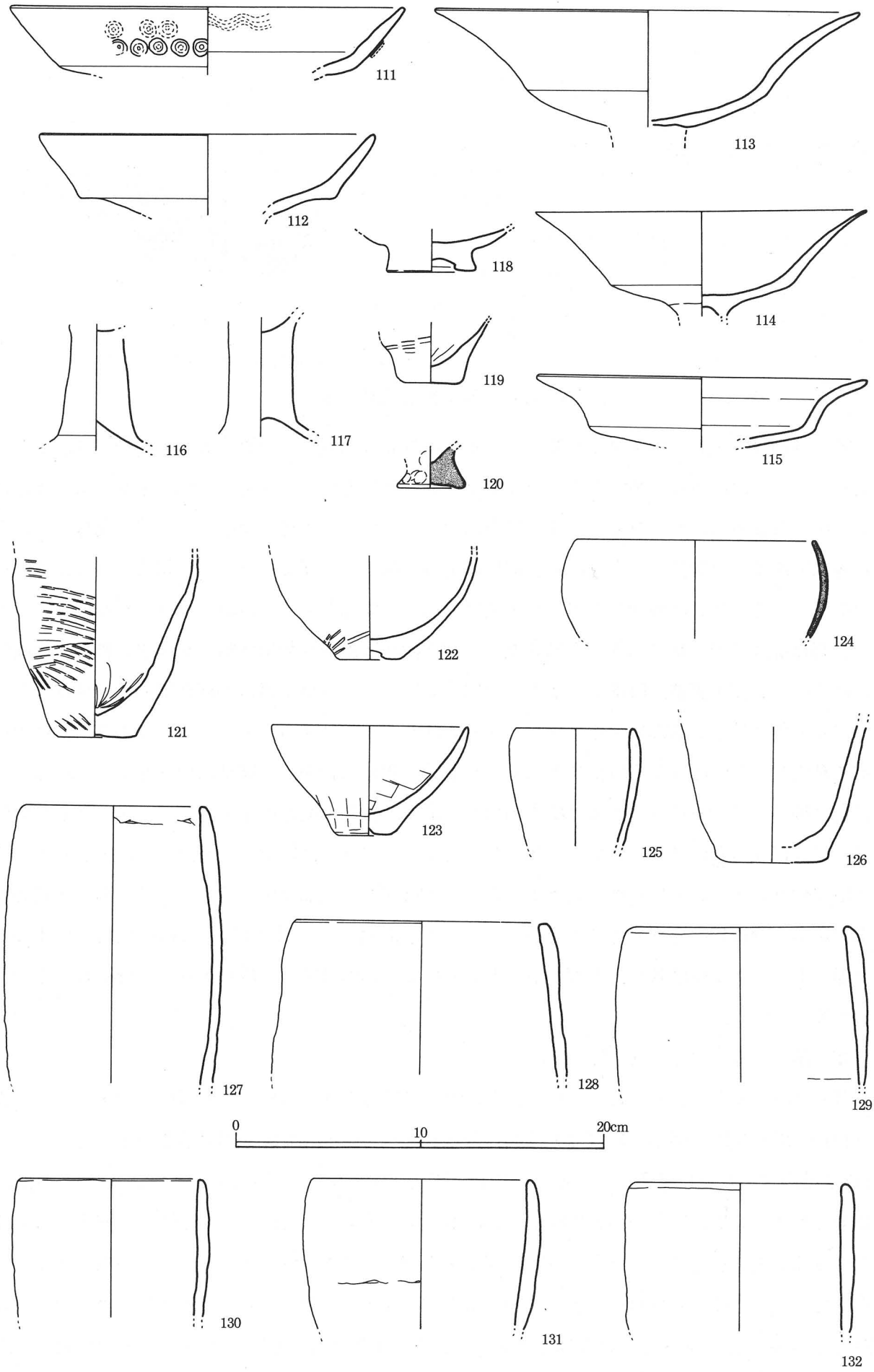



fig. 15　落ちこみ２出土土器（S＝1/3）

## 第３節　飛鳥～奈良時代の遺構と遺物

### Ａ．遺構

当該期の遺構には、Ｉ区北東半部で検出された、流路１、溝２、北西半部で検出された溝３などがある。

〔１〕流路１（fig.６,16,17）

調査の行程上、樋門部分を先行調査したため、流路本体や「しがらみ」を完掘できなかった。ただ、地山である砂礫層の位置や土層の堆積状況によって、ある程度、規模などを推定することができる。流路１は、杭№Ａ６－17Gから杭№Ａ６－14Bにかけて検出された。流路方向は、他の大部分の溝と同じように、東南から北西に向かって流れていたものと考えられる。なお、この方向は、周辺の丘陵が海岸線に向かって伸びていくという自然地形に起因している。

流路１の規模は、推定最大幅約14m、長さ29m以上、深さ約２mをはかる大規模なもので、さらに南北に続いていくものと考えられる。ただ、流路１北西部では、幅が４m前後に狭くなっている。杭№A6－16Eから杭№A6－17Gにかけての流路１内では、東肩に直交する形で、木材を利用した「しがらみ」が検出された。その規模は、東西8.3m以上、南北5.1m以上、深さ１m以上をはかる。遺存していた構築材は約150本にのぼり、木材の保存状況は良好であった。「しがらみ」は東南からの水流をうけて枝材などの木は倒れていたが、丸太材などはほぼ現位置を保っていた。

その構造は、立杭が少なくほとんど横木で構成されている。立杭は流路の東肩に直交して数本が確認されるのみである。おそらく、立杭は丸太や横木を固定するために打ち込まれたものといえよう。すなわち「しがらみ」は、径約0.3m、長さ5.5m以上の丸太を約2.5m間隔で二本据え、立杭で固定し、それらに直交する形で、横木として多量の枝材や切断した幹材をわたし、その後暗灰色粘質土などで被覆したものであろう。横木の最長のものは約2.4mをはかる。また、建築材などの加工されたものはなく、丸太にも皮が残っていた。木材（松か）の幹や枝を荒く切り、そのまま使用したものと考えられる。

「しがらみ」内の土層は、西壁を参考にすると、上から⑩黒色粘質土、⑪暗灰色シルト、⑫黒灰色粘質土、⑮灰オリーブ砂礫、⑯オリーブ黒粘質土となり、その下は調査していないのでわからない。⑮灰オリーブ砂礫はT.P.＋6.9m前後から約30cmの厚さで堆積しているが、このことは流路内にかなり強い水の流れがあったことを示している。また、⑩黒色粘質土は「しがらみ」全体をおおっている有機質土で、枝や木の葉などの有機物が含まれていた。おそらく、この層の堆積によって、「しがらみ」の機能は停止したものと考えられる。

なお、「しがらみ」の機能については、東南方向から来た水を制御して、流路１の東肩に平行して伸びる溝２に導水していたものと考えられる。なお、出土遺物は少なく摩滅しているものが多いが、その築造時期については７世紀中葉から８世紀頃と考えておきたい。また、流路１の北西部では、布留式の直口壺がほぼ完形で出土しているが、遺構の時期を示すものかどうかはわからない。

〔2〕溝2（fig.6）

溝2は、杭№A6－16Fから杭№A6－16G付近で東南から北西方向にかけて検出された。上部をかなり削平されているが、その規模は幅約1m、長さ5.5m以上、深さ約0.15mをはかる。溝底面のレベルはT.P.＋8m前後である。断面の形態は浅い皿形で、埋土は暗灰色シルト及び細砂である。

溝底面のレベルから、自然地形とは逆の北西から東南に流れていたものと考えられる。

おそらく、水田などに導水する溝で、「しがらみ」と一体のものであろう。溝内からは、飛鳥IIの須恵器が出土しており、7世紀中葉頃の構築と考えられる。

〔3〕溝3（fig.6,18）

溝3は、杭№D10－18から杭№A6－18Aでほぼ南北方向に検出された。溝の規模は、幅約2.3m、長さ6m以上、深さ約0.4mをはかる。第7トレンチによって東肩の一部が削平されている。

溝3の堆積は、上から暗灰色粘質土、茶灰色細砂と暗灰色シルトの互層になる。地山は褐色砂礫及び灰色粘土である。

なお、茶灰色細砂からは、製塩土器や蛸壺、土師器、須恵器、土錘、炭化木、河原石などが出土している。土器については、遺存良好で、遠くから流れてきたものではない。また、土器の出土状況から、割れた破片を廃棄したものでもなく、ほぼ完形になるものを廃棄している。

なお、溝3は明確な掘り込みをもつものではなく、土器が滞留する凹状の遺構かもしれない。

土器の年代は、7世紀中～後葉頃と考えられる。おそらく、周辺に当該期の集落が存在するのであろう。

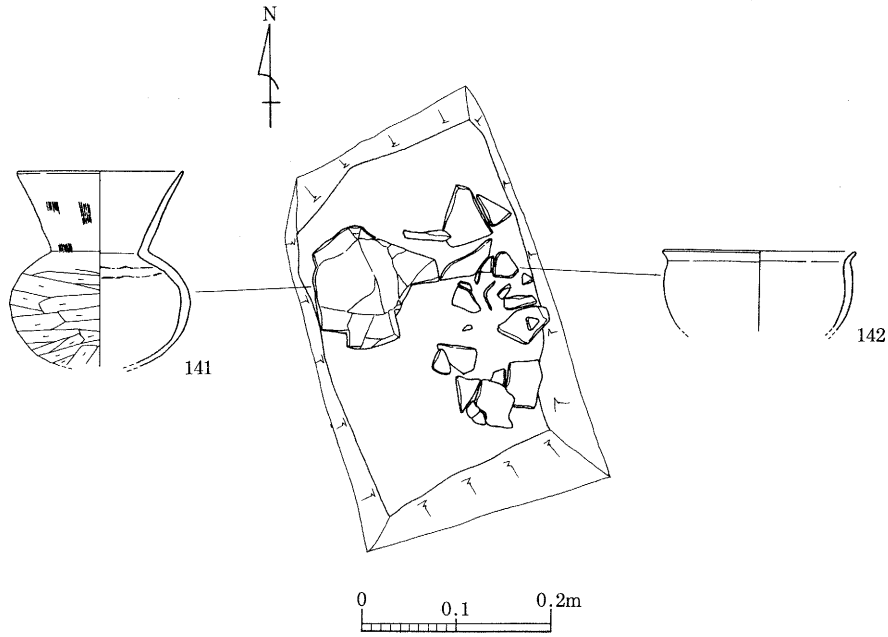



fig.16　流路1北西部土器だまり（S＝1/8）

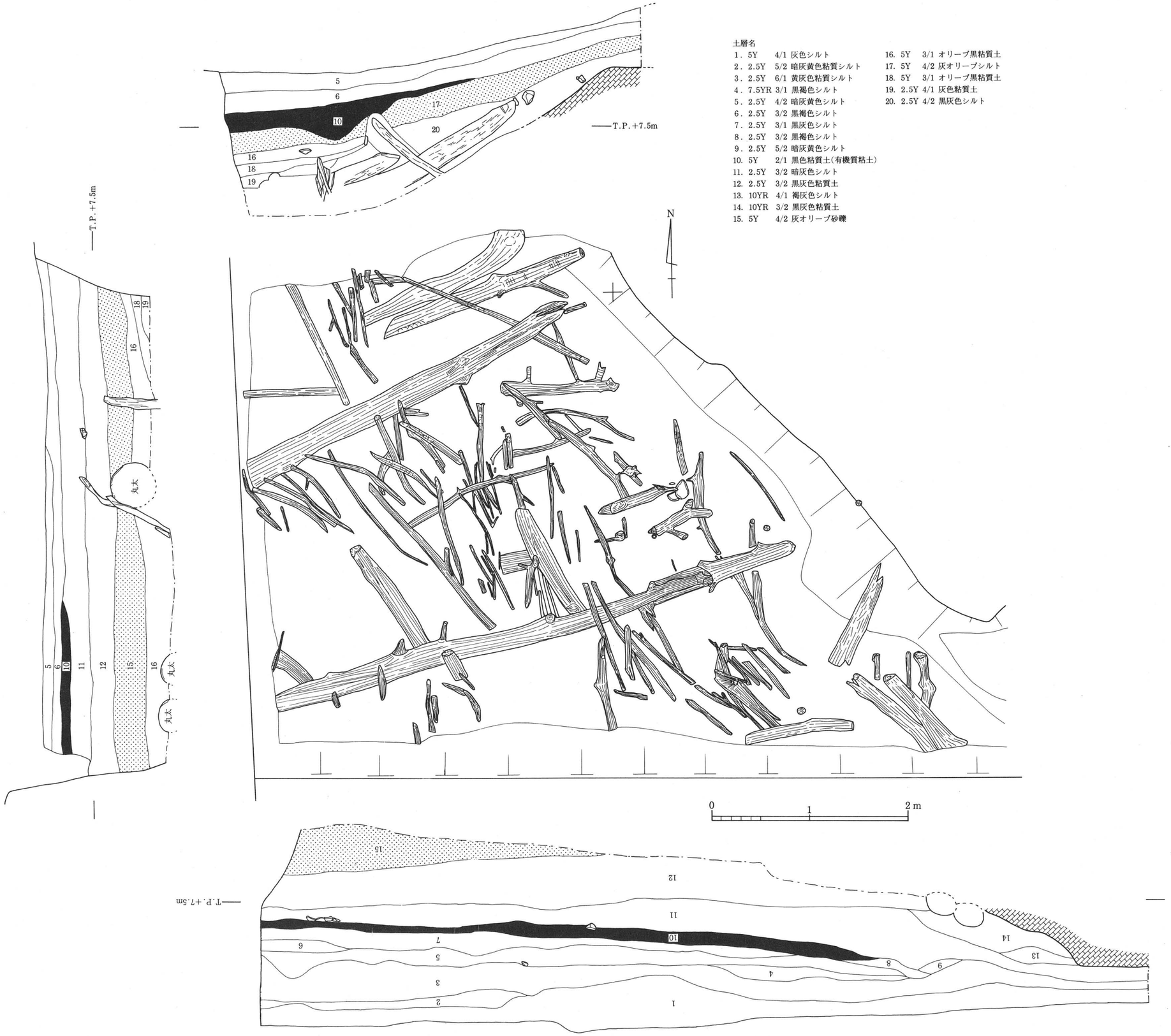



fig. 17　流路１内しがらみ平面図及び北・西・南壁断面図（S=1/40）

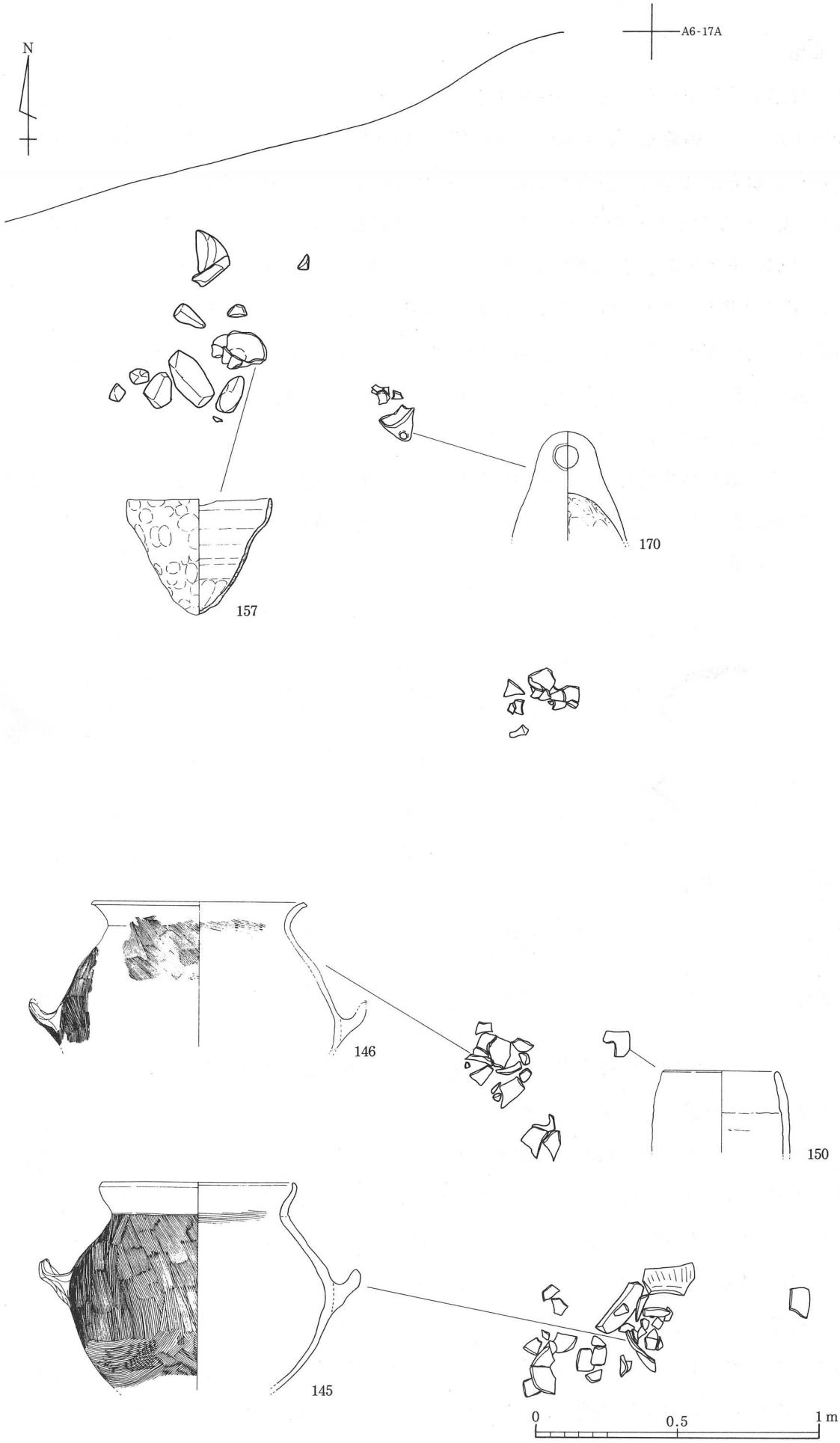



fig. 18　溝３遺物出土状況（S＝1/20）

B．遺物

〔1〕流路1「しがらみ」および溝2出土土器（fig.19）

流路1からは、須恵器（134,136）、土師器（135,139）、製塩土器（137）、土錘（140）などが、溝2からは須恵器（133）、飯蛸壺(138)などの飛鳥時代から奈良時代までの土器が出土している。133は口径が小型化した須恵器の蓋である。天井部には回転ヘラ切り痕が残る。口縁部はやや外反し、端部は丸味を帯びる。調整は回転ヘラケズリ後、回転ナデ。時期的には飛鳥IIであろう。134も口径が小型化した杯身であり、出土地点は異なるが、133とセットになるような形態である。口縁端部と底部を欠損しており、受部は受け口状になっている。137は鉢状を呈する製塩土器片で、外面には指オサエがみられる。内外面は、熱によって橙色に変色している。139は土師器皿片である。復元口径は約19.6cm、高さ約3.2cmをはかる。口縁端部内面に沈線がめぐる。調整については、器表が摩滅していて明確ではないが、飛鳥時代のものであろう。138の口縁部は内傾し、端部に面をもつ。器肉は約7mmと分厚い。体部外面は横方向のタタキ調整、内面はナデ、外面に黒斑が遺存している。

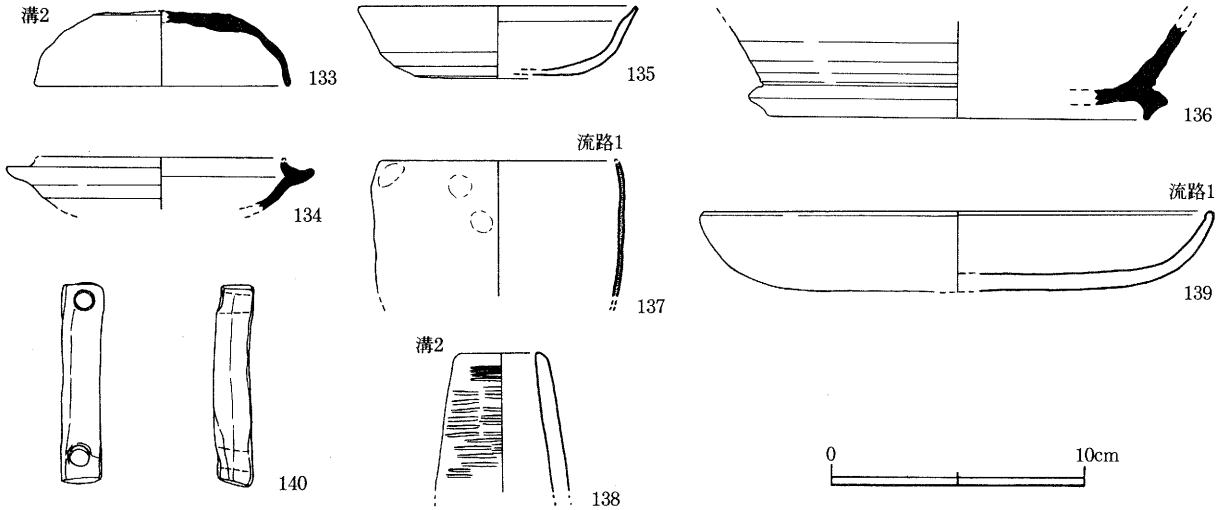



fig.19　流路1内「しがらみ」および溝2出土土器（S＝1/3）

〔2〕流路1北西部出土土器（fig.20）

ここからは、弥生土器（143）、土師器(130,131)、製塩土器（133）などが出土している。143は壺の底部であろう。平底で、外面に木葉痕が遺存していた。内外面は摩滅のため、調整は明確ではない。また、器表が白色化や赤変している部分があり、製塩土器として使用された可能性がある。141は丸底の直口壺である。口縁部は外反して伸び、端部は尖り気味。体部は丸味を帯びるが、底部は欠失している。外面の調整は、口縁部が縦方向のハケ、体部が横方向のヘラケズリ、内面はナデ調整である。典型的な布留式の丸底壺である。142は鉢である。口縁部は外湾し、端部を丸くおさめる。器表の調整は、摩滅のため、明確ではない。144は深鉢状の製塩土器で、外面は指オサエによる調整のみ。器肉はうすく、内外面は赤変している。

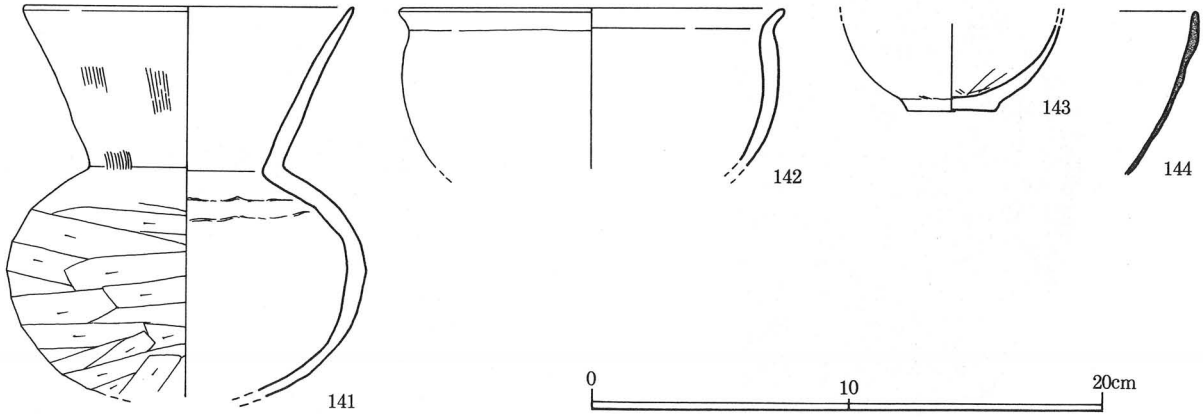



fig.20　流路１北西部出土土器（Ｓ＝1/3）

〔３〕溝３出土土器（fig.21,22）

溝３からは、土師器（145～149,155,156）、蛸壺（150,170）、須恵器（151～153）、土錘（154）、製塩土器（157～169）などが出土している。

145は土師器把手付の甕である。底部は欠失している。口径は約20cm、把手を含めた体部最大径は約33cmをはかる。口縁部は上方へ内湾しながら伸び、端部は肥厚する。体部は球形を帯び、中ほどに一対の把手を貼りつける。把手は上方に内湾し、端部は尖り気味。口縁部内外面は横ナデ。体部外面には縦方向のハケ調整を施し、底部付近のみ、その上から横方向のハケを施す。体部内面はナデや指オサエであるが、口頸部内面にのみ横方向のハケが遺存している。また、口頸部内面、底体部に煤が付着している。体部外面には一部黒斑が遺存している。146も土師器把手付の甕である。体部下半は欠失している。口径は約22cm、把手を含めた体部最大径は約35.6cmをはかる。口縁部は外反し、端部は面をもつ。体部中央には一対の把手を貼りつける。口縁部内外面は横ナデ。口頸部から体部にかけての外面には、右下がりのハケを施す。体部内面はナデや指オサエであるが、口頸部内面にのみ横方向のハケが遺存している。また、底体部に煤が付着している。147は土師器把手付甕の把手片と考えられる。調整はヘラケズリ後、指オサエを施している。148は土師器甕である。口縁部はくの字状に外反し、端部は角張る。体部は丸味を帯びる。体部外面は細かな縦方向のハケを施した後、右下がりの荒いハケを施す。体部外面には黒斑が遺存している。149も土師器甕である。口縁部はくの字状に外反し、端部に面をもつ。端部内面には一条の沈線を施す。また、口縁部内面には横方向のハケが遺存している。体部内外面は右下がりの荒いハケを施す。155も土師器甕の口縁片である。復元口径約20.2cmをはかる。口縁部は外反し、端部は面をもつ。端部内側に一条の沈線を施す。調整は横ナデであるが、内面には横方向のハケが遺存している。156は土師器椀である。口縁部は内湾し、端部は内側に傾斜し、面をもつ。器表が摩滅しているため調整は明確ではない。150は蛸壺である。口縁部は若干内湾しながら立ち上がり、端部を丸くおさめる。体部内面には粘土紐の痕跡が遺存している。調整は内外面ともナデ。151は須恵器杯身片である。口縁端部を欠失している。受け部内側には沈線が一条み

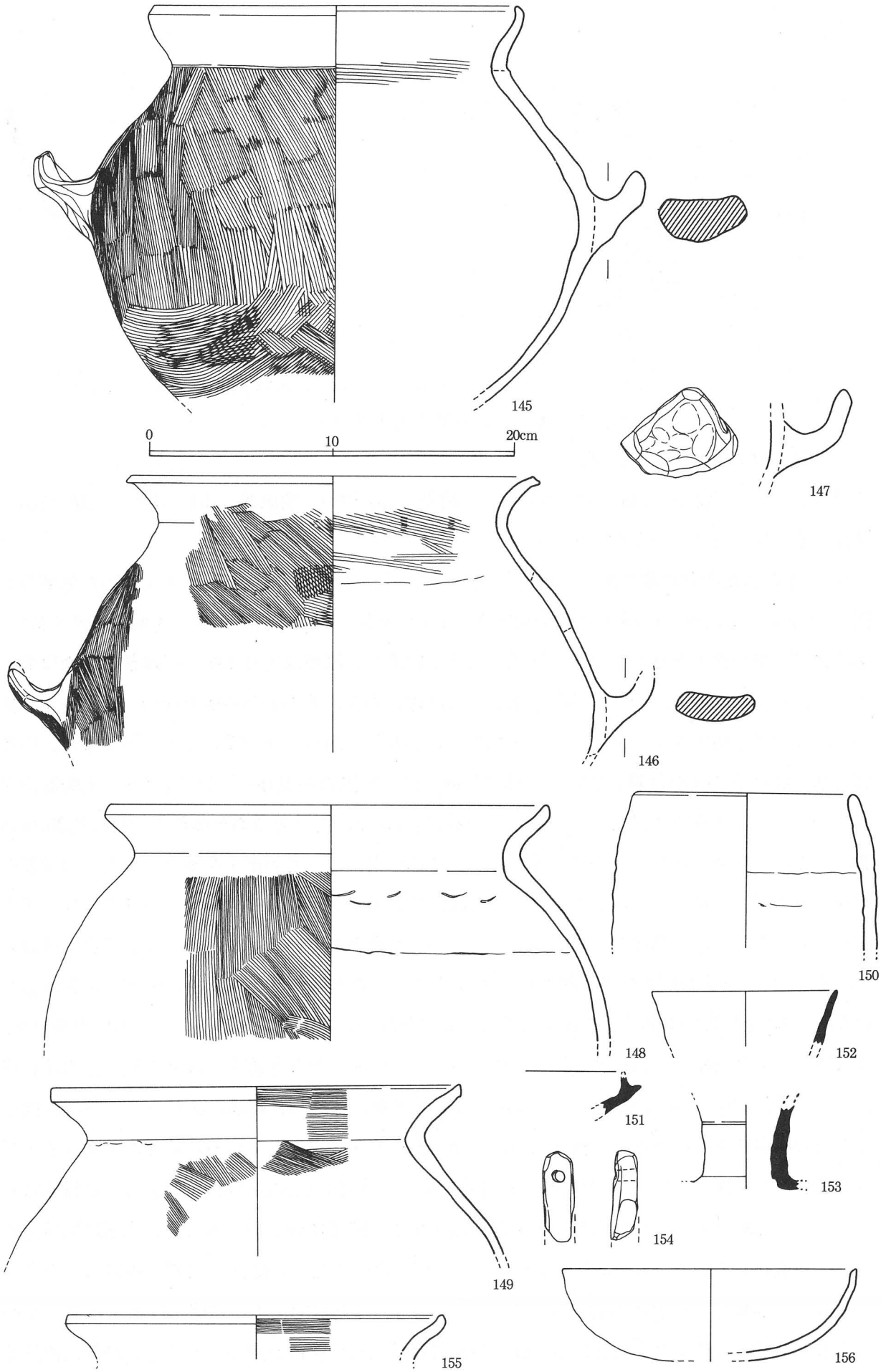



fig. 21　溝３出土土器①（S＝1/3）

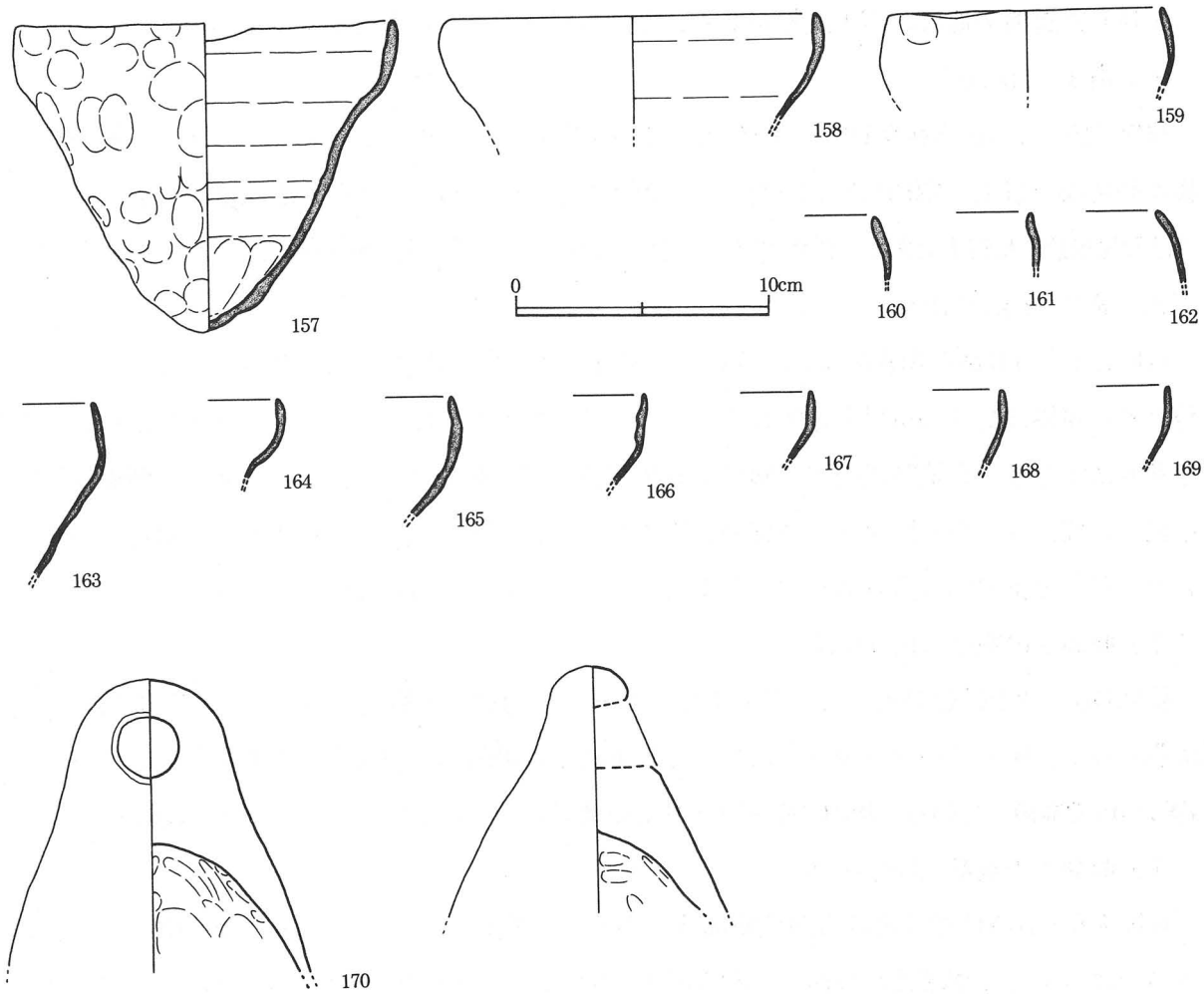



fig. 22　溝３出土土器②（S＝1/3）

られる。152も須恵器口縁片である。口縁部は斜め上方に真っすぐ伸び、端部は尖り気味。153と出土地点も近く、一連の個体と考えられる。153は須恵器平瓶の口頸部の破片であろう。外面には一条の沈線が施されている。内外面は回転ナデ調整。154は棒状土錘で、両端に紐穴を一つづつ穿つタイプのものであるが、片側は欠損している。

157は泉州地域で初めて、ほぼ完形で出土した深鉢形の製塩土器である。口径14.6cm、器高12.2cm、器厚約3mmをはかる。口縁部は内湾して立ち上がり、端部は尖り気味。調整は外面と底部内面が指オサエであり、内面には幅約1.5cm幅で粘土紐積み上げの痕跡を遺している。また、口縁の一部は片口状になっている。意図的なものであろう。焼成は良好であり、色調は黄橙色を呈する。158,163,164,166などは、口縁部のみの破片であるが、157と同じような形態をもつ深鉢形の製塩土器であろう。また、159～162は口縁部がほぼ直立する鉢形の製塩土器であろう。

170は、土師質の釣鐘形真蛸壺の破片である。残存高は11.6cm、紐穴の径は約2.4cmをはかる。調整については、吊り手の外面はナデ。体部外面はナデ、内面は指ナデを施す。色調は浅橙色を呈する。

## 第４節　その他の遺構と遺物

### Ａ．遺構

上述した遺構の他に、出土遺物がなく、時期の明確ではない遺構などがある。

〔１〕溝４（fig.６）

杭№.D15－５Qから杭№.D15－８S付近に位置するもので、東南から北西に向かって伸びる。規模は長さ25m以上、幅約1.8mをはかり、南側で溝５と合流している。断面は逆台形を呈し、埋土は灰黒褐色系粘質土である。遺物は出土していないが、おそらく庄内～布留式期のものと考えられる。

〔２〕溝６（fig.６,23）

杭№.D15－９Rから調査区南端にかけて位置するもので、溝４同様、東南から北西に向かって伸びる。規模は長さ19m以上、幅約１mをはかり、溝５に合流している。土層の堆積は、断面２を参考にすると、古墳時代の包含層である黒灰色シルトを切り込んでいる。溝６の断面はU字形を呈し、埋土は上から灰オリーブ細砂、灰オリーブシルトである。時期のわかる遺物は出土していないが、埋土や切り込み面などから中世の遺構と考えられる。

〔３〕断面３の観察（fig.６,23）

杭№.D15－３P付近の落ちこみ２直上で、断面３（南壁）を観察する。上から、橙色シルト、灰色シルト、灰オリーブシルトとなり、その下には古墳時代の包含層である黒灰色シルトが厚さ約0.15mで堆積している。地山は暗オリーブ灰砂礫であり落ちこみ２によって西側に傾斜している。

〔４〕断面５の観察（fig.６,23）

杭№.A６－16A付近で南北方向の断面５（西壁）をみると、堤のハガネ土が明瞭にわかる。ハガネ土は、Ｉ区北東端部から西へ、調査区の北側に沿って約60m分を確認した。その規模は、上面幅約2.2m、深さ約1.8mをはかり、断面形態は明確な逆台形を呈する。埋土は、厚さ約0.2mの黄灰色粘土を水平に撞き固めた堅牢なものであり、人力で掘削するのは容易ではない。このハガネ土による堤体の構築は、土層の堆積などから、近世以降と考えられる。なお、この断面付近の地山の高さはT.P.＋8.3m前後である。

〔５〕II区の調査（fig.６,23）

II区の調査は、双子池の中央を東西に走る市道のすぐ北側、双子下池の堤体西南部に位置する。すでに、コンクリート製水路やボックスが布設されている場所である。幅約３m、長さ約10mの調査区を設定したが、大部分が地山近くまで削平されており、遺構などは検出されなかった。ただ、部分的に残ったいるところもある。（断面１）

南壁の土層は、T.P.＋10.3mくらいまで、水路建設に伴う攪乱土がある。一部、地山が遺存しているのはT.P.＋10m前後である。また、地山は東側に傾斜している。地山の直上には、灰色粘質土が堆積しているだけで、いわゆる古墳時代の包含層である黒灰色シルトはみられない。おそらく、黒灰色シルトは地山が高く残っているところには堆積せず、傾斜地や落ちこみに堆積しているのであろう。

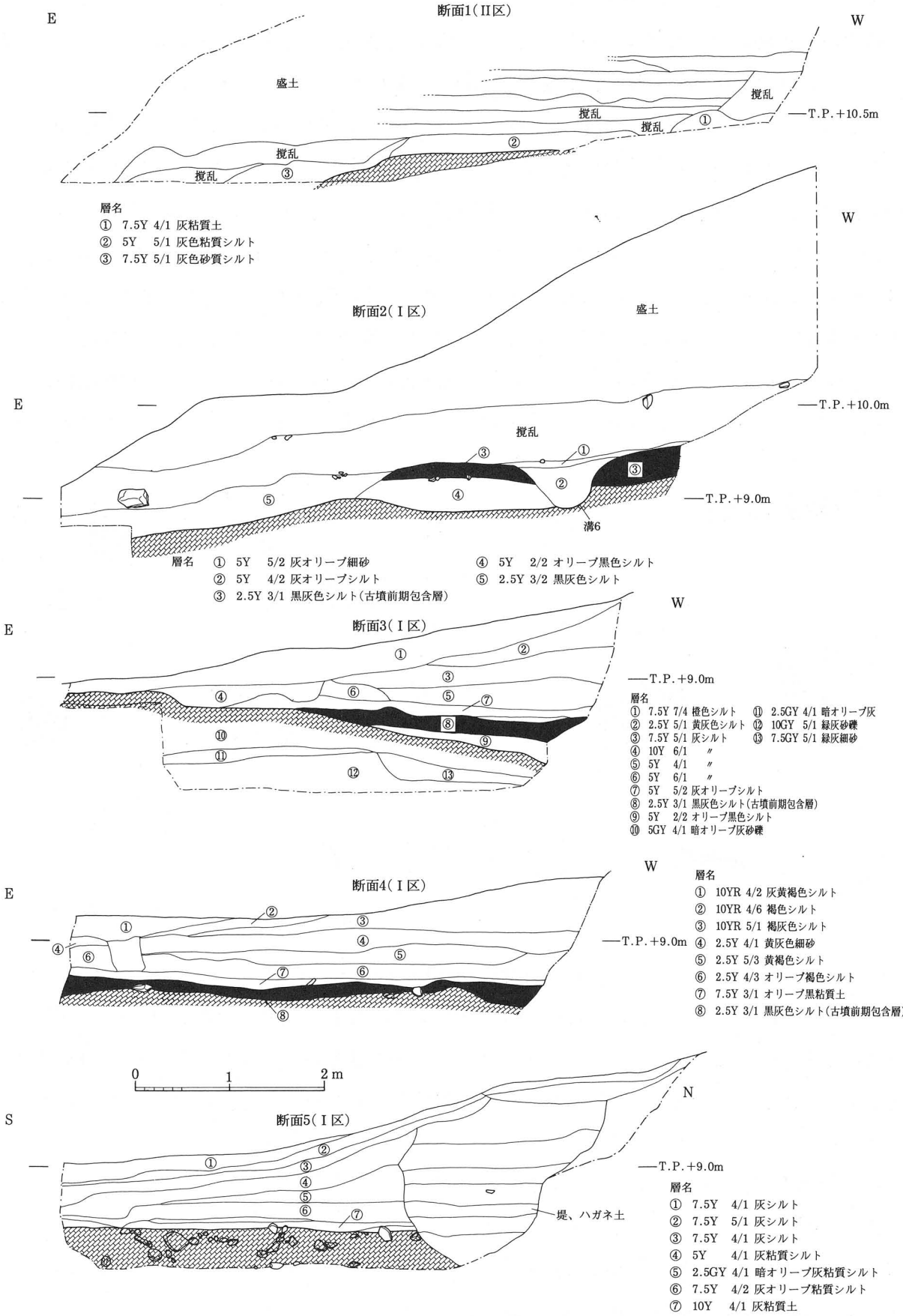



fig. 23 調査区横断面図 (S=1/60)

B．遺物

〔1〕黒灰色土他出土土器（fig.24）

古墳時代前期頃の包含層である黒灰色土からは、弥生後期の土器（171,173,174）、製塩土器（172,175～179）などが、また他に須恵器（180）、青磁（181）なども出土している。

171は、壺の口縁片である。口縁部は外反し、面をもつ。その端面には円形浮文を貼りつけている。器表は摩滅しており、調整は明確ではない。173も壺の口縁片である。端部は面をもち、円形浮文を貼りつける。174は脚台で、端部を欠失している。調整は器表が摩滅しているため不明瞭である。172は比較的体部が残っている脚台式の製塩土器である。体部は丸味を帯び、底部はハの字状に踏張り、上げ底である。底端部は明瞭に指頭痕が遺存している。体部の器表は剝離のため明確ではない。175は体部と底部間のくびれが明瞭ではなく、体部へ直立気味に立ち上がる。底端部は接地のための面をもつ。調整は体部外面が左下がりのタタキ、それ以外は指オサエ及びナデ。176の製塩土器も体部が一部遺存している。外面は、体部が右下がりのタタキ、脚部

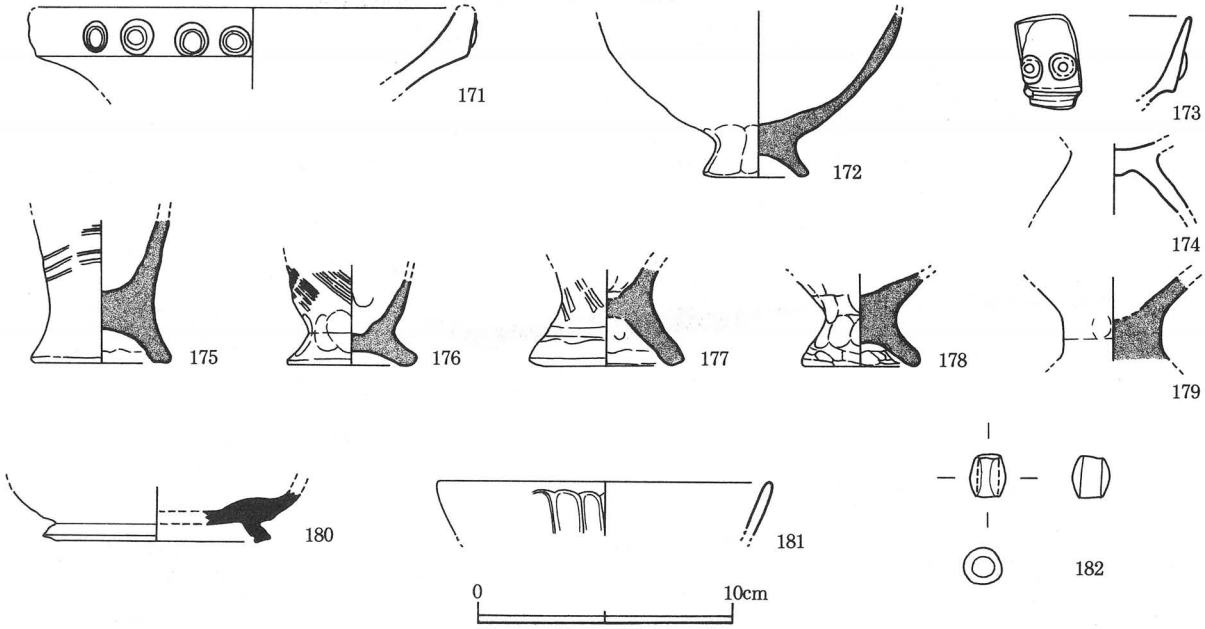



fig.24　黒灰色土他出土土器（S＝1/3）

は指オサエ、内面はナデ。177も脚台である。脚部はハの字状に開き、端部は面をもつ。調整は、外面が右下がりのタタキ、内面は指オサエを施す。178の調整は指オサエのみである。181は青磁椀の破片である。口縁部は外反し端部は丸味を帯びる。体部外面には蓮弁文が施されている。

〔2〕青灰色シルト他出土土器（fig.25）

183は瓦器小皿である。体部内面は不定方向の暗文を施す。口縁部内外面は横ナデ。体部外面は指オサエ。13世紀中～後葉頃のものであろう。184・185は黒色土器（内黒）の底部片である。10世紀中頃のものであろう。

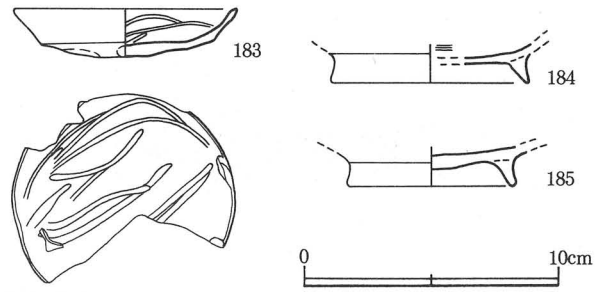



fig.25　青灰色シルト他出土土器（（S＝1/3）

# 第5章　まとめ

前章までにおいて、平成8年度の調査成果を概観してきたのであるが、ここでは男里遺跡で検出された主要な遺構、遺物について平成7年度の調査成果も含めて時代毎にまとめておきたい。

さて、男里遺跡周辺の地形は、遺跡のほぼ中央に位置する双子池を中心として、「古・男里川」の痕跡ともいえる南北の旧河道が存在し、その左岸には自然堤防と沖積段丘、その右岸には沖積段丘が広がっている。遺跡は、その双子池を中心に東西約1.1km、南北約1.3kmにわたって展開する泉南地域屈指の複合遺跡である。現在の男里の集落は、双子池の西側の自然堤防上に位置していることになる。

さて、男里遺跡の調査は、行政機関によって1977年度から小規模ながらも徐々に進められてきた。ただ、最近、関西新空港建設に伴う府道の建設や民間開発による比較的大きな調査によって、遺跡の内容が急速に明らかになりつつある。本書に記載された調査成果もその一部であり、本調査区周辺でも、95－1区では縄紋時代晩期の突帯文土器を伴うピット群、90～92－水区では弥生時代中期から古墳時代前期の河道と溝、92－2区では古墳時代前期の河道および古墳時代後期の溝、95－池区では古墳時代前期の河道および飛鳥～奈良時代の河道、77区では奈良時代と鎌倉時代の掘立柱建物、95－2区では平安時代の掘立柱建物などが検出されている。

**弥生時代後期～古墳時代前期**

この時期の遺構には、溝1、溝7、溝5、落ちこみ1、落ちこみ2などがある。また、昨年度の95－池区でも河道1が当該期の遺物を伴って検出されている。溝1は、東南から北西に伸びる大溝である。その断面は逆台形を呈し、埋土は暗灰色系粘質土である。また、溝1は東側に若干弧を描いており、環状になる可能性が高い。さらに、溝7も溝1の西側に近接して伸びているが、庄内式から布留式にかけての遺物が一括出土している。出土状況から考えると、徐々に廃棄されたものではなく、まとまって廃棄された状況を呈していた。すなわち、庄内式期後半の土器と布留式土器が共存している可能性が高い。また、同時に蛸壺や土錘、脚台式の製塩土器も伴出しており、本遺跡が海浜部に近接しているという立地条件を窺わせる。さらに、生駒西麓産の庄内甕がほぼ完形で一点のみ出土している。本地域と中河内地域との交流が考えられよう。なお、出土した甕の一部に赤変、白色化したものがあり、製塩用に使用された可能性がある。おそらく、調査区周辺の近接したところに当該期の集落が存在するのであろう。

さて、溝7などから出土した土器群は、概ね庄内式併行期の後半に位置付けられるものと考えられるが、泉南地域における当該期の遺跡として、泉佐野市湊遺跡、貝塚市脇浜遺跡などがある。両遺跡とも多量の製塩土器や漁撈具が出土している。すなわち、泉南地域の庄内式併行期から布留式期は、土器製塩活動の一大生産地に変化するのである。この時期以降、内陸における製塩土器の出土も増加し、紀伊半島西岸での製塩土器の出土も急増していく。古墳時代前期は、土器製塩活動の生産と供給が拡大していく一大画期なのであろう。

飛鳥～奈良時代

この時期の遺構としては、流路１「しがらみ」、溝２、溝３などがある。「しがらみ」は、丸太や切断した幹や枝を組み合わせ、その上部に粘土を被覆した大規模なものであるが、残念ながら調査の行程上、完掘できなかった。おそらく、北、西、南に続いていくものと考えられる。この「しがらみ」と関連する遺構に、すぐ東側から近接して検出された溝２がある。すなわち、流路１内の南側からの水流を「しがらみ」で制御してフローした水を溝２に導水したものと考えられる。溝２に導水された水は、南側の水溜めや水田などにひかれたのであろう。こういった計画的な導水システムは、７世紀後葉になって、当地では初めて出現するのである。

最近では、八尾市久宝寺遺跡で大規模な堰「しがらみ」が検出され、布留式期の築造と考えられている。また、溝３は、明確な掘り方をもたない凹状の遺構であるが、その埋土から把手付甕、蛸壺、土錘、製塩土器などが一括出土した。これらの土器は、ほとんど摩滅がみられず、遠くから流れてきたものではない。中でも、完形で１点だけ出土した深鉢型の製塩土器（表紙カット）は、紀伊半島沿岸部や播磨南部でみられる器形であって、泉州地域では初めての出土であった。従来、口縁片が出土しても、その全体の形が明確ではなかった。そういった意味からもこの土器の出土は重要であろう。なお、この深鉢形の製塩土器片は10数点出土している。

以上、今年度の調査成果を二つの時代を中心として述べてきた。ただ、本遺跡では、４世紀から７世紀前葉までの約350年間（古墳時代）の遺構、遺物の情報が空白になっている。どこへいくのであろうか。しかし、朧気ながら、遺跡の輪郭が摑めつつある。すなわち、弥生時代中期の集落は、双子上池の東部の段丘面に中心があり、庄内式期の集落は双子下池周辺に、飛鳥時代の集落は双子池西側の自然堤防上に立地しているのであろう。

さて、飛鳥時代の遺構・遺物の確認は、当該期の集落の存在を窺わせている。双子下池の西南部、1977年度調査において確認された掘立柱建物は、その一部である可能性が高い。さらに、遺物の示す時期幅（７世紀中～８世紀）から、ある一定期間、集落が存続していた可能性が指摘できよう。なお、遺跡の東約５kmには海会寺が位置している。今年度の調査でその存在が想定される集落は、海会寺の建立時期に併行している。海会寺の存在と、この男里の集落との関連が興味深い。やはり、泉南市域では、当該期においても樫井川流域と男里川流域の二大勢力の存在が指摘されるのである。

参考文献

・泉佐野市教育委員会『湊遺跡発掘調査報告書』1982
・(財)大阪府埋蔵文化財協会『脇浜遺跡発掘調査報告書』1986
・積山　洋「律令制期の製塩土器と塩の流通」『ヒストリア』第141号　1994
・(財)大阪府文化財調査研究センター『久宝寺遺跡・竜華地区（その１）発掘調査報告書』1996
・大阪府教育委員会『男里遺跡発掘調査概要・Ⅰ』1997

# 報　告　書　抄　録

| | |
|---|---|
| ふりがな | おのさといせきはっくつちょうさがいよう・II |
| 書名 | 男里遺跡発掘調査概要・II |
| 副書名 | 府営地域総合オアシス整備事業（泉南地区・双子池改修工事）に伴う |
| 巻次 | |
| シリーズ名 | |
| シリーズ番号 | |
| 編著者名 | 上林史郎 |
| 編集機関 | 大阪府教育委員会　文化財保護課 |
| 所在地 | 〒540 大阪府大阪市中央区大手前2丁目　☎06(941)0351 |
| 発行年月日 | 西暦　1997年3月31日 |

| ふりがな<br>所収遺跡名 | ふりがな<br>所在地 | コード | | 北緯<br>°′″ | 東経<br>°′″ | 調査期間 | 調査面積<br>(m²) | 調査原因 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 市町村 | 遺跡番号 | | | | | |
| 男里遺跡（おのさと いせき） | 泉南市男里地内（せんなんし おのさと ち ない） | 27228 | | 34°<br>21′<br>30″ | 135°<br>15′<br>40″ | 1996年11月1日<br>～<br>1997年2月13日 | 1,000m² | 溜池堤体改修工事 |

| 所収遺跡名 | 種別 | 主な時代 | 主な遺構 | 主な遺物 | 特記事項 |
|---|---|---|---|---|---|
| 男里遺跡 | 集落 | 弥生時代後期～古墳時代前期・飛鳥～奈良時代 | 溝・流路「しがらみ」・ピット | 弥生土器・土師器・須恵器・製塩土器・瓦器・木杭 | ・庄内式期の大規模な溝が土器を伴って検出された。<br>・飛鳥時代の大規模な「しがらみ」を検出し、周辺で水田跡が検出される可能性大。<br>・泉州地方で初めて、完形の飛鳥時代の製塩土器が出土した。 |

# PLATE

調査区全景垂直写真（上が北）

ＰＬ．１
双子池全景
斜め写真

北から

南から

北から

ＰＬ．２
調査区全景
斜め写真

東から

西から

南から

PL. 3
遺構

溝１全景
（南から）

溝１，溝７断面
（北から）

溝１南端
（北から）

PL. 4
遺構

調査区西南部
（南から）

溝５全景
（東から）

調査区西端部
（東から）

溝７遺物出土状況
（北西から）

溝７遺物出土状況
（北から）

溝１断面
（北から）

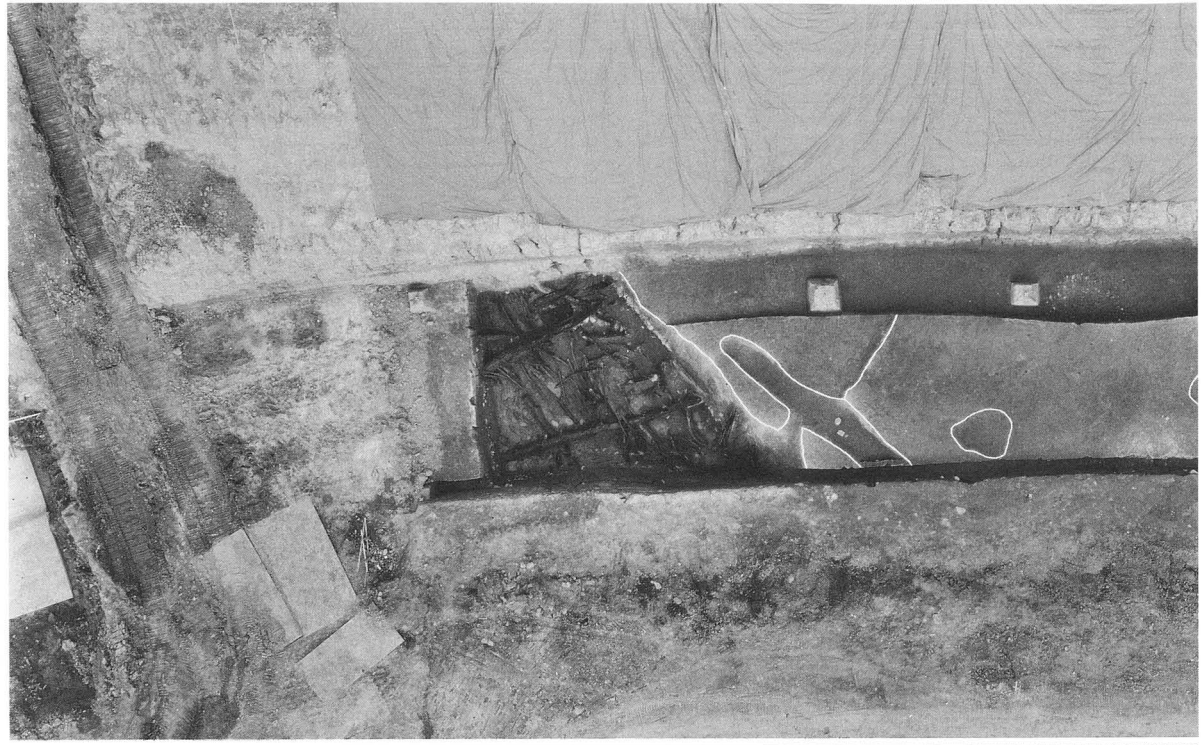
PL. 6
遺構

流路１北西部
遺物出土状況
（西から）

落ちこみ１遺物出土状
況（D10－18T付近）

落ちこみ２遺物出土状
況（D15－４Q付近）

ＰＬ．７
遺構



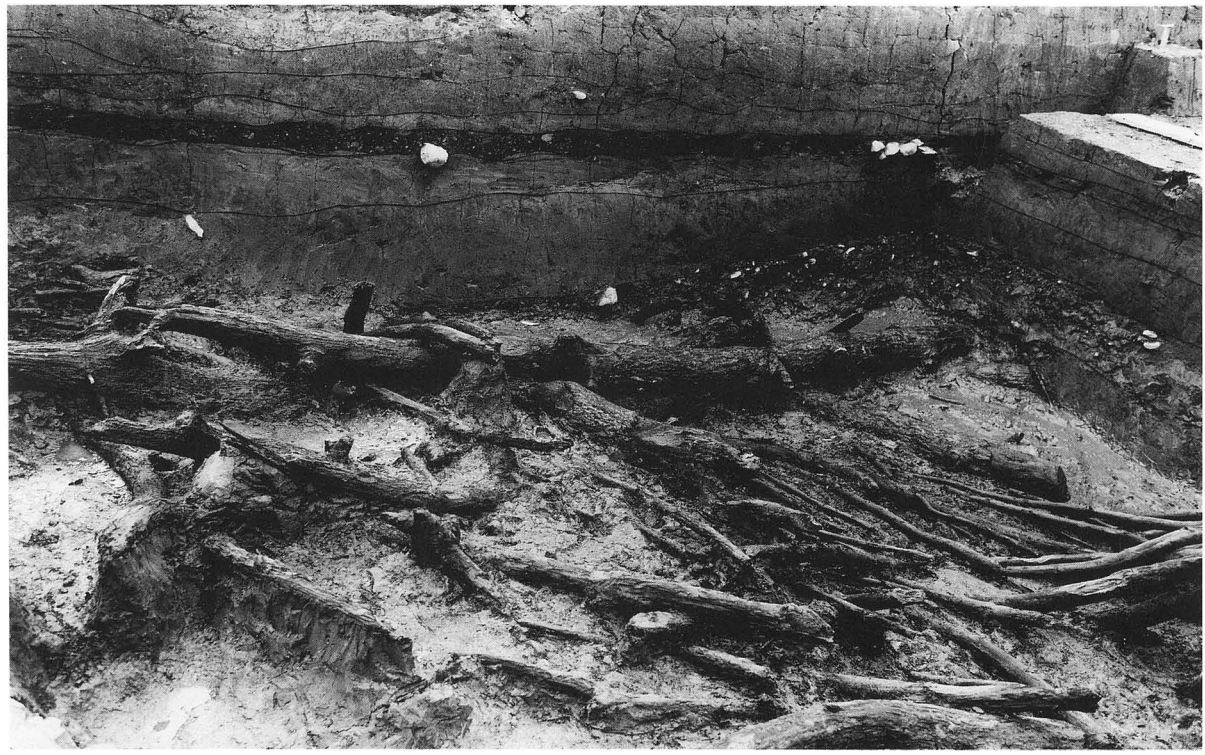
流路１垂直写真

「しがらみ」細部
（西から）

「しがらみ」細部
（南から）

PL. 8
遺構

「しがらみ」細部
（北から）



流路１南壁
（北から）

流路１西壁
（東から）

樋門付近全景
（南から）

溝７全景
（南西から）

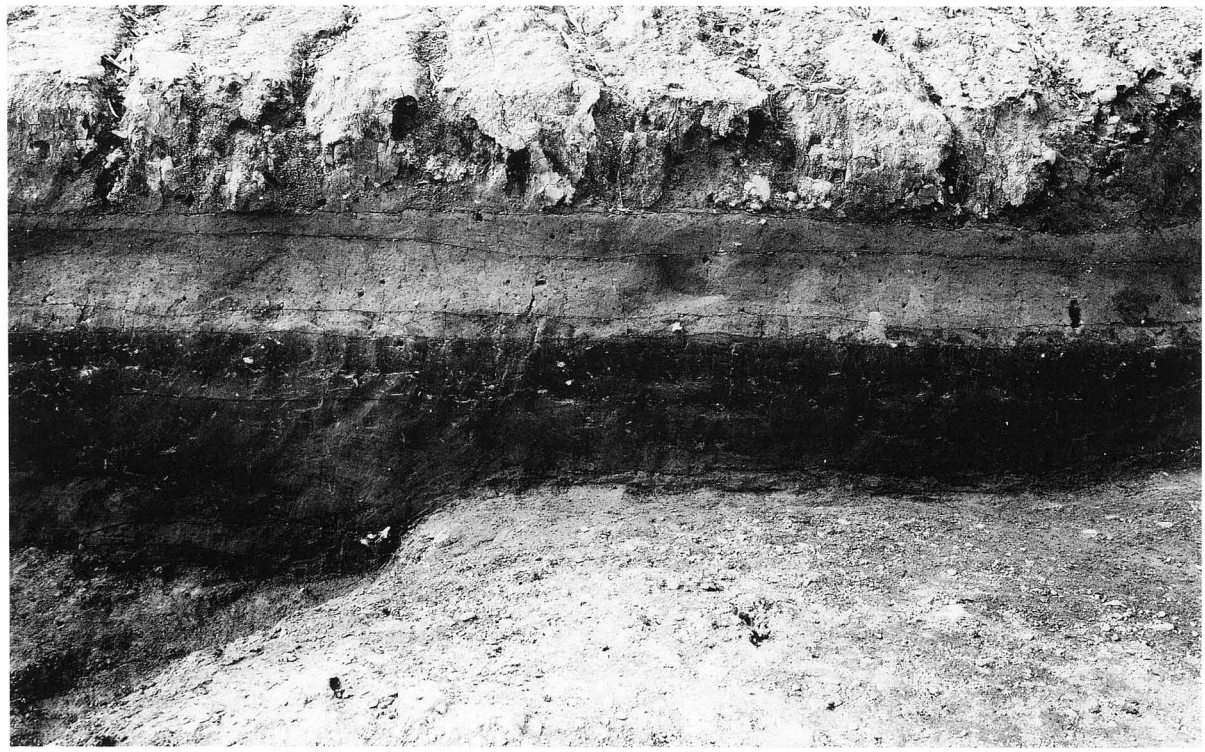
溝７南側遺物出土状況
（北から）

溝７北側遺物出土状況
（南西から）

同
（北東から）

同
（上から）

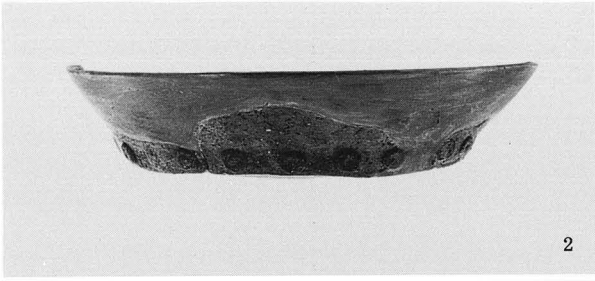
落ちこみ２断面
（D15－４Ｑ付近，東から）



溝５北側断面
（D15－８Ｒ付近，東から）

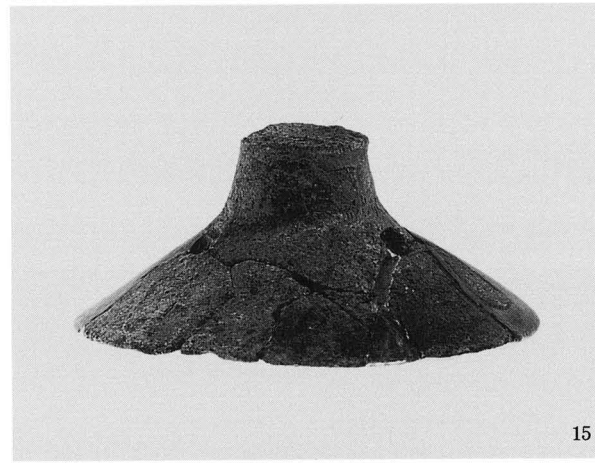
溝７直上南北断面
（東から）

ＰＬ．12
遺物

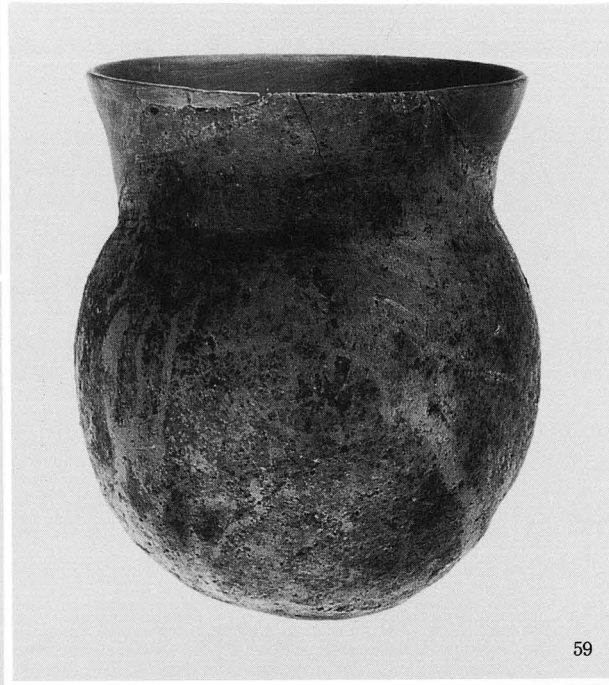

2

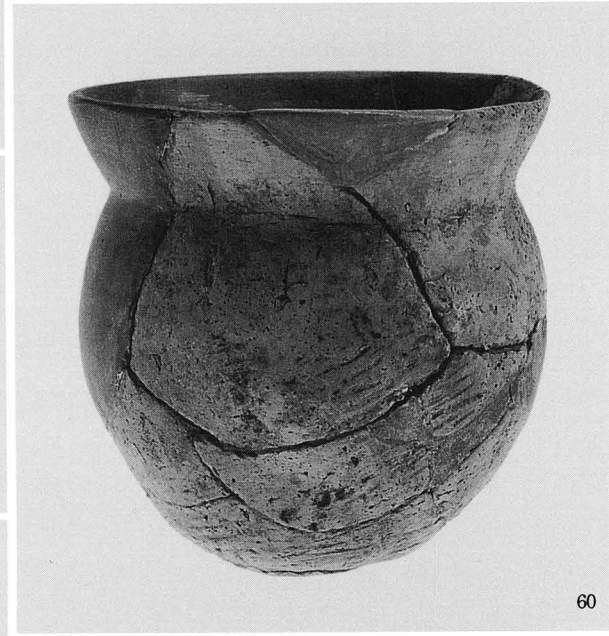
11

14


15

20


59


60

64

62

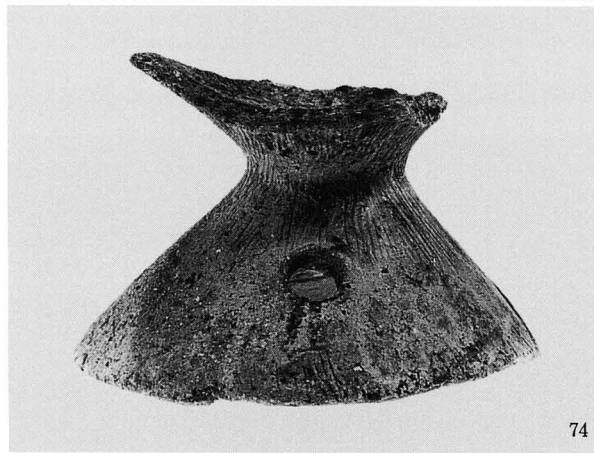
溝１（２，11，14，15，20）
溝７（59，60，64，62）

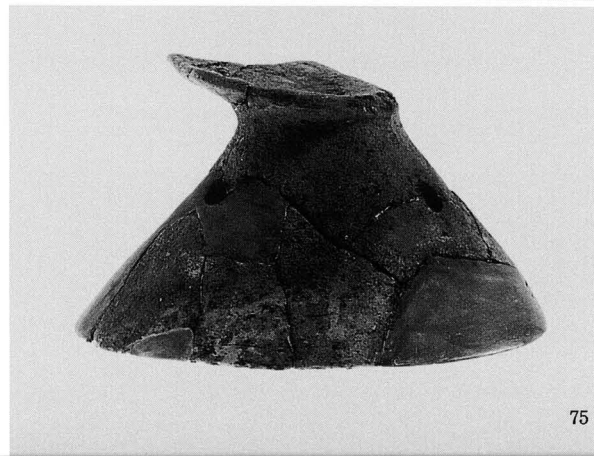
ＰＬ．13
遺物

71

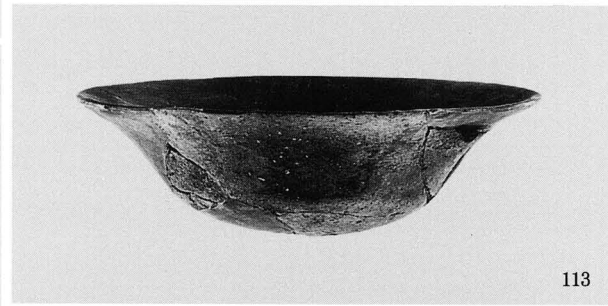
72

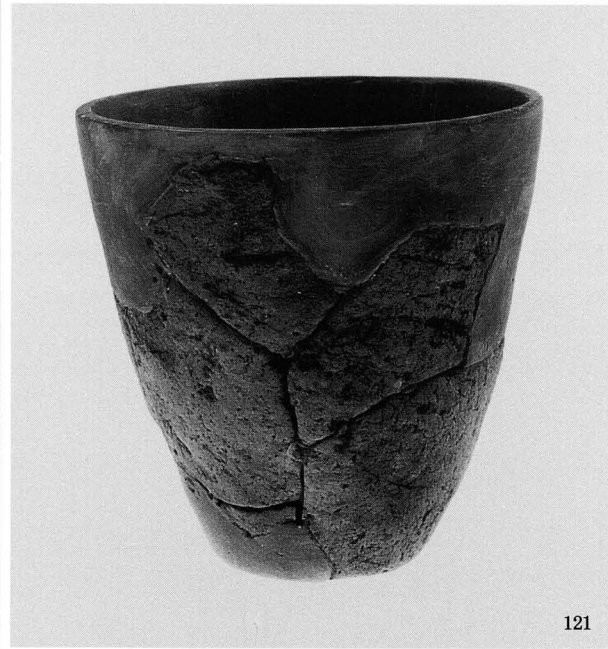
73

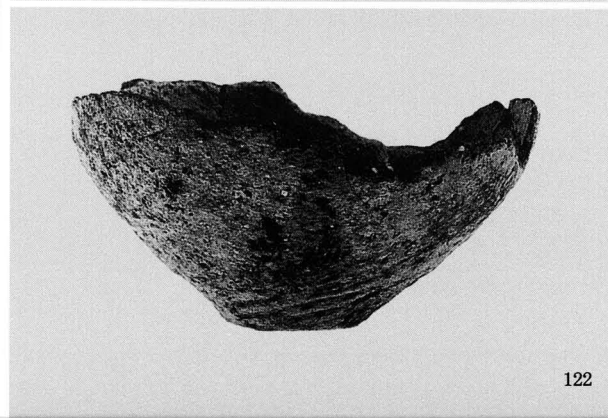

74


75

76


113


121


122

溝７（71～76）
落ちこみ２（113，121，122）

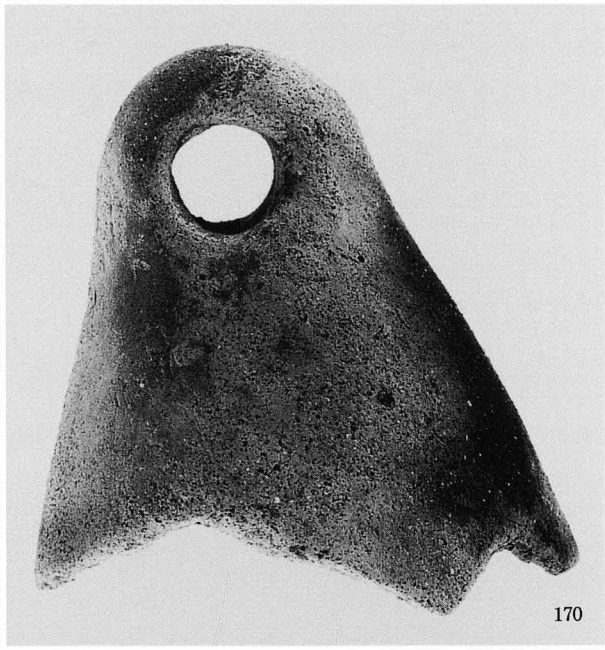
ＰＬ．14
遺物

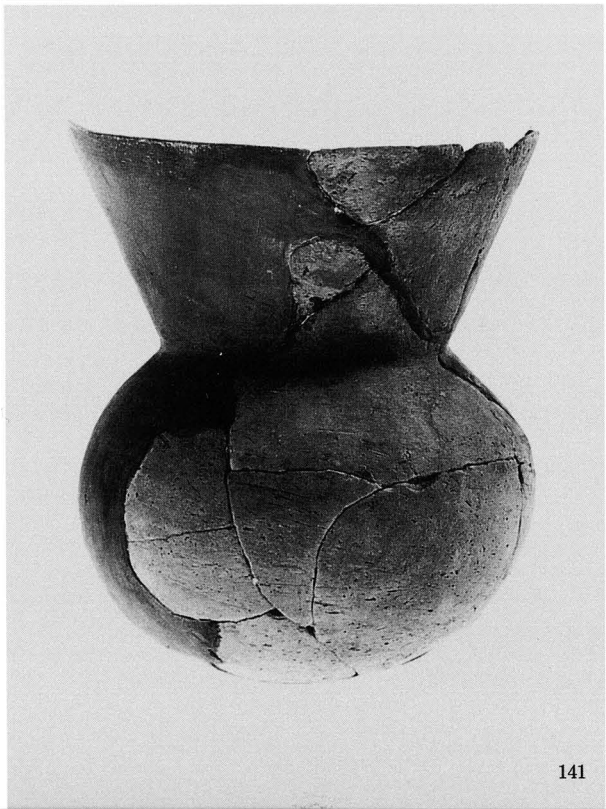
123

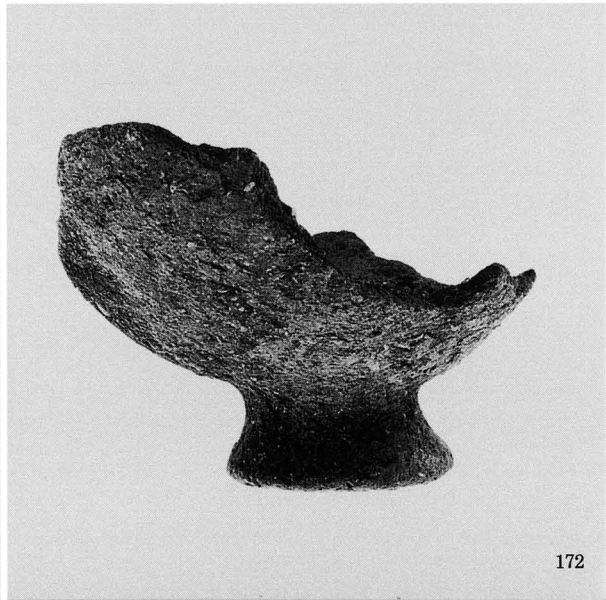
145

127

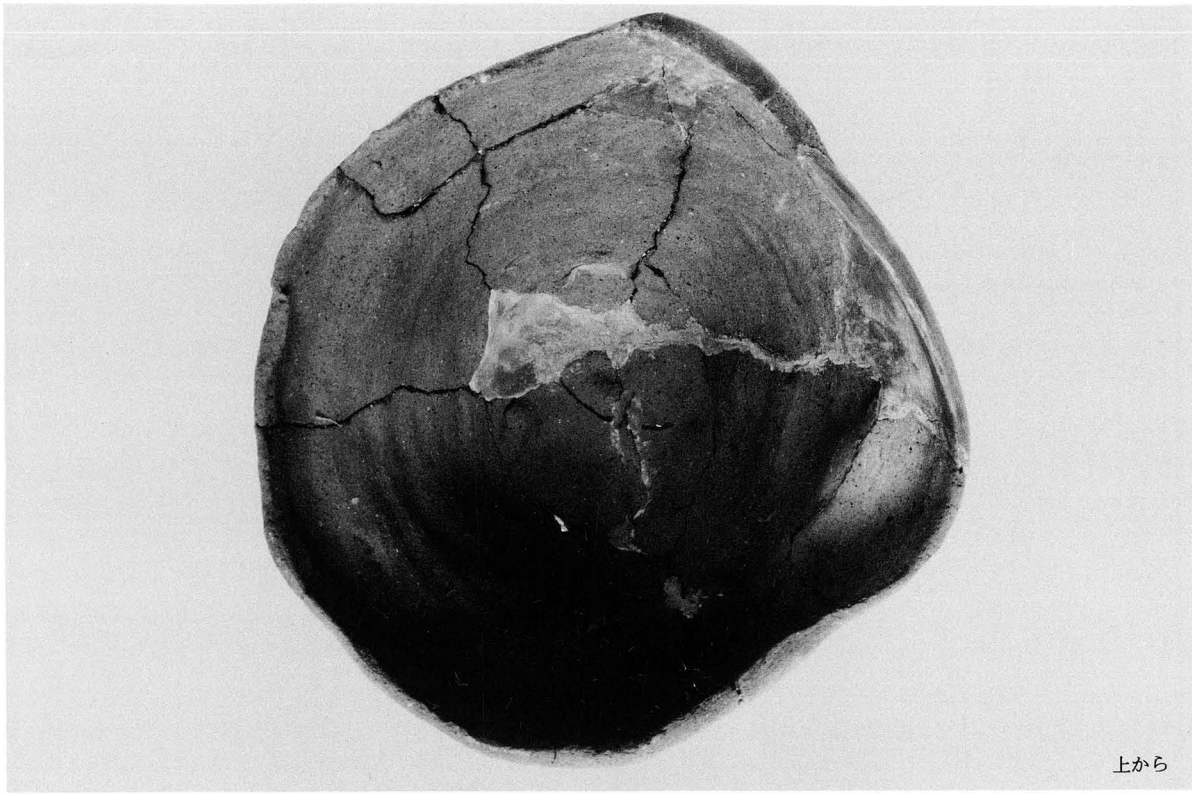
149


170


141


172

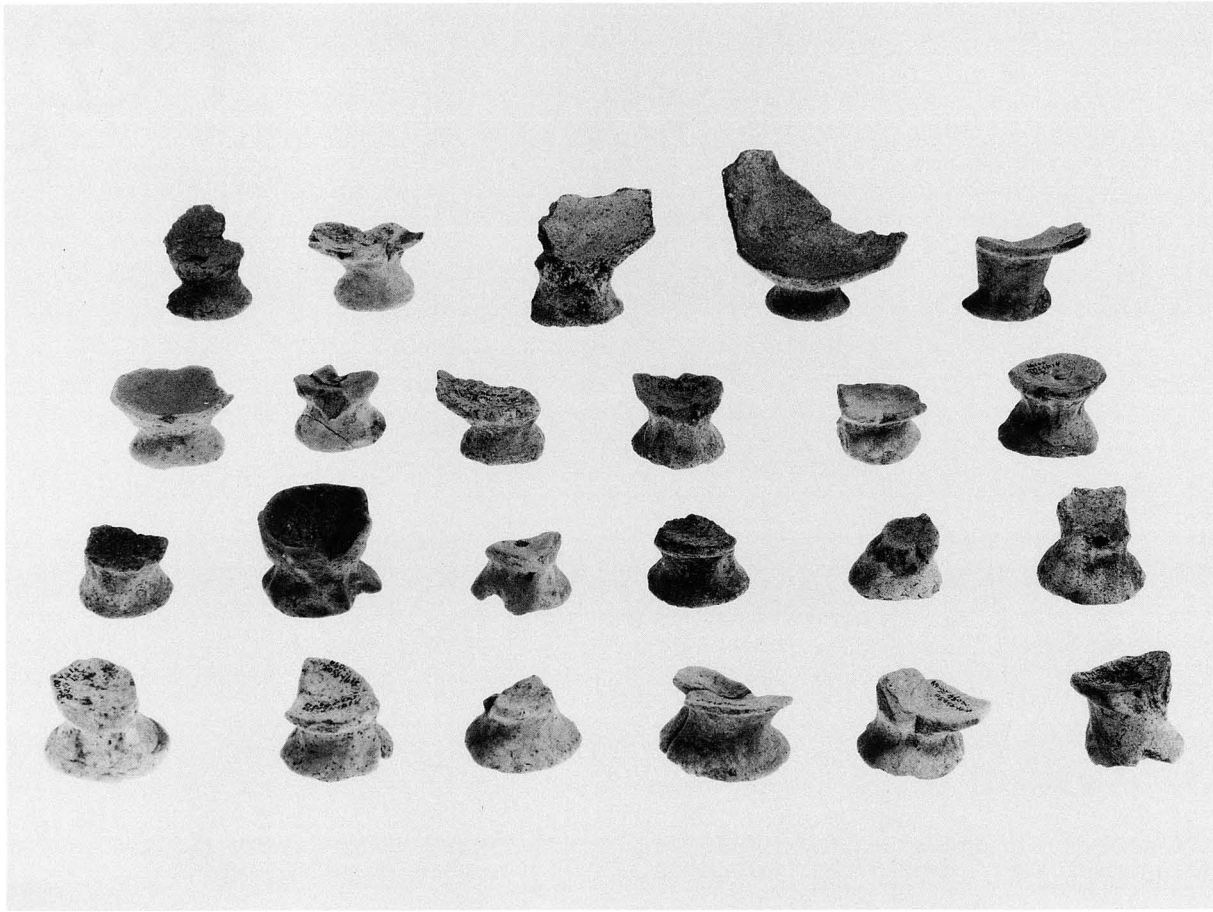
落ちこみ２（123，127）
流路１北西部（141）
溝３（145，149，170）
黒灰色土（172）



上から

横から
157

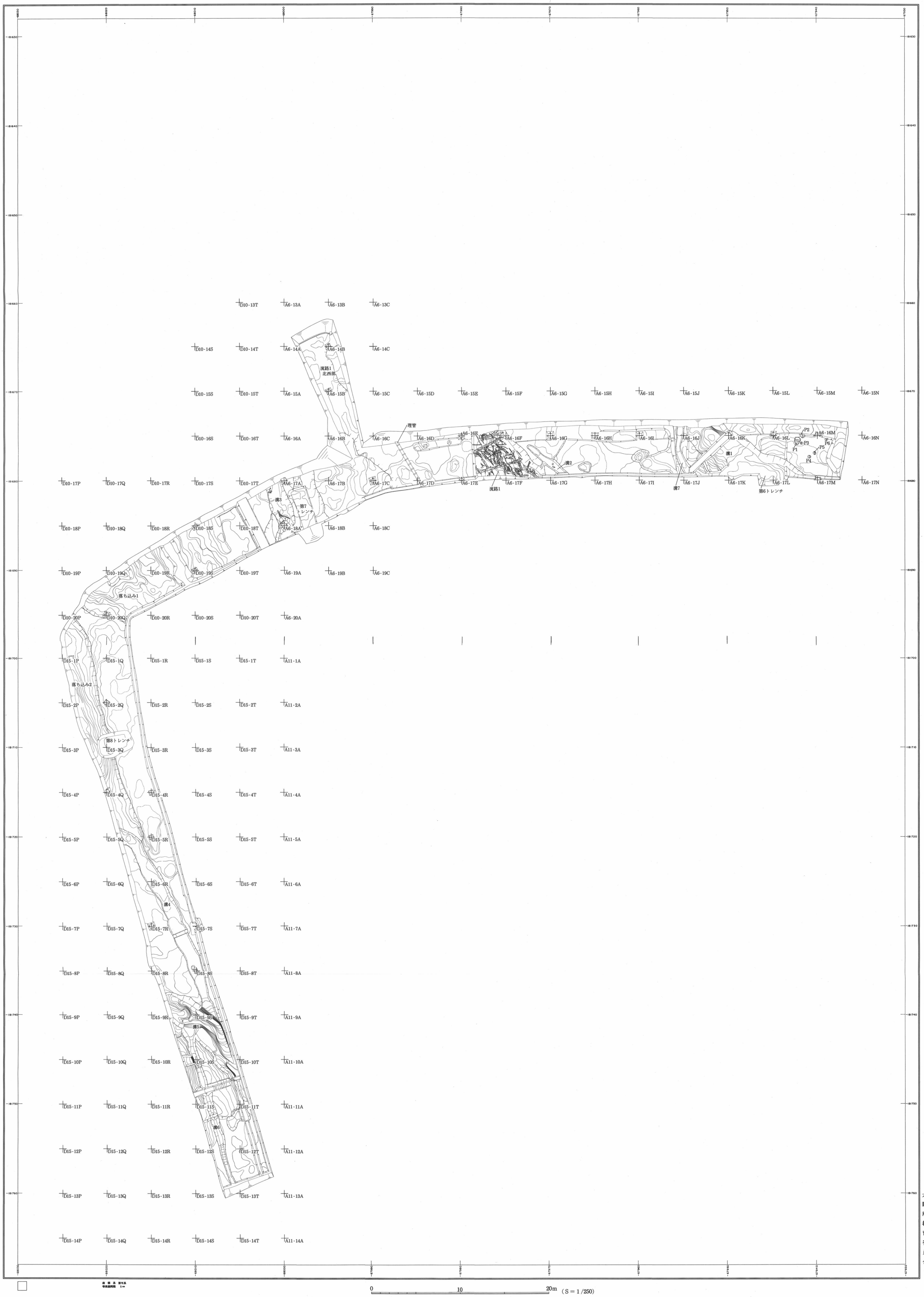
下から



製塩土器

土錘

# 男里遺跡平面図




大阪府教育委員会